

船石遺跡

1983年3月

佐賀県上峰村教育委員会

上峰村文化財調査報告書

ふな 船 いし 石 遺 跡

1983年3月

佐賀県上峰村教育委員会

序

上峰村大字堤の船石区に鎮座する船石天神宮周辺には船石や鼻血石、亀石などと呼ばれる巨石が存在しており、以前から支石墓ではないかと注目を集めていました。ところがこの周辺に地元船石区により、区住民のスポーツ振興のために運動広場を設置する計画がもたれたため、村教育委員会では国庫補助を受けて、遺跡の保護を目的とした確認調査を実施しました。

調査の結果、巨石群の謎も解明され、他にも重要な遺構や遺物が多数出土するなど多大な成果を挙げることができました。本報告書が古代文化研究のための資料として、また郷土の文化財を認識・理解するための資料として役立つ事を願います。

この調査に終始尽力くださった県教育委員会文化課の調査員、ならびに秋山巖船石区長はじめ地元の方々に感謝の意を表します。

なお、現地は調査終了後埋め戻して旧状に復しており、運動広場計画と調整しながら遺跡の今後の保存・活用について検討を重ねていくところです。

昭和58年3月

佐賀県上峰村教育委員会

教育長 重松守男

例 言

1. 本書は上峰村教育委員会が国庫補助事業として昭和57年度に実施した船石遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は上峰村教育委員会が主体となり、調査の実際は佐賀県教育委員会文化課がおこなった。
3. 遺構の実測は調査員などがおこなった。
4. 遺構の写真撮影は七田がおこない、遺物の写真撮影は原口定（県教育委員会文化課調査第1係）がおこなった。なお、P.L.1, P.L.4の航空写真は堤安信（調査第1係）による。
5. 出土した遺物の整理や調査記録類の整理は佐賀県文化財資料室でおこなった。担当したものは下記のとおりである。
遺物復元……高島澄子・広滝敏子・古川万鶴代・村瀬邦子
遺物実測……石井のり子・馬場美奈子・藤原倫子・山口成子・七田
トレース……貞包洋子・藤原倫子・蒲原京子（調査第1係）
現像・焼付…原口 定・古賀栄子
6. 本書の執筆、編集は七田がおこなった。なお編集にあたり矢野佳代子（調査第1係）・藤原倫子（資料室）の協力を得た。

凡 例

1. 調査時には遺構番号は一連番号を付し、その前にSB（堅穴住居跡）、SK（土壇・貯蔵穴）、SD（溝）、ST（古墳）、SX（不明）を標記したが、本報告書では遺構別に新たな番号を付した。それらの番号対照表を本文末につけた。
2. 遺構の法量はm単位、遺物の法量はcm単位を原則として用いた。
3. 遺構配置図や各遺構実測図中の北方位はすべて磁北である。
4. 「船石」という地名は「舟石」ともかくが、現行行政上の用法に従い、遺跡名は船石遺跡とした。

本文目次

I. 位置と環境	1
II. 調査の経過	6
1. 調査に至る経過	6
2. 発掘調査の経過	6
III. 南区の調査	9
1. 遺構	9
(1) 竪穴住居跡	9
(2) 土壇・貯蔵穴	9
(3) 溝跡	10
2. 遺物	11
(1) 土器	11
(2) 石器	13
(3) 鉄器	14
IV. 北区の調査	14
1. 遺構	14
(1) 甕棺墓	15
(2) 支石墓	20
(3) 古墳	23
(4) 基壇状遺構	29
2. 遺物	32
(1) 甕棺	32
(2) 船石下竪穴内出土遺物	36
(3) 古墳出土遺物	37
(4) 船石下祭祀遺物	43
V. 総括	44
(1) 弥生時代の船石遺跡	44
(2) 古墳時代の船石遺跡	47
(3) 中世の船石遺跡	49

挿 図 目 次

Fig. 1	船石遺跡の位置および周辺遺跡	2
2	船石遺跡周辺地形図	8
3	船石遺跡南区出土弥生土器実測図	12
4	船石遺跡南区出土石器実測図	13
5	11号土壇出土鉄製動先実測図	14
6	船石遺跡北区甕棺墓実測図	17
7	船石遺跡1号支石墓(亀石)実測図	20
8	船石遺跡2号支石墓(船石)実測図	21
9	船石遺跡2号支石墓下部竪穴実測図	22
10	船石遺跡1号墳(鼻血石)石室実測図	24
11	船石遺跡2号墳・3号墳実測図	25
12	船石遺跡2号墳・3号墳周溝土層断面図	26
13	船石遺跡2号墳石室実測図	27
14	船石遺跡3号墳石室実測図	28
15	船石遺跡基壇状遺構実測図	30
16	船石遺跡基壇状遺構石列実測図	31
17	船石遺跡基壇状遺構土層断面図	31
18	船石遺跡北区出土甕棺口縁部実測図	33
19	船石遺跡1号支石墓甕棺実測図	34
20	船石下部竪穴出土鉄鍬実測図	36
21	船石下部竪穴出土石斧実測図	36
22	船石下部竪穴出土弥生土器実測図	36
23	船石遺跡古墳出土土師器・須恵器実測図	38
24	船石遺跡古墳出土鉄器(1)実測図	40
25	船石遺跡古墳出土鉄器(2)・石器実測図	42
26	船石遺跡船石下祭祀遺物実測図	43

折 り 込 み

- 1 船石遺跡遺構配置図
- 2 支石墓周辺甕棺墓位置図

表 目 次

Tab. 1	船石遺跡出土竪穴住居跡一覧表	10
2	船石遺跡南区出土土壇・貯蔵穴一覧表	10
3	船石遺跡北区甕棺墓一覧表	15
4	船石遺跡北区出土甕棺一覧表	35
5	遺構番号新旧対象表	52

図 版 目 次

- PL. 1 船石遺跡航空写真
- 2 船石遺跡遠景・近景、北区調査前状況
 - 3 船石遺跡南区
 - 4 船石遺跡北区航空写真
 - 5 調査前の船石・鼻血石・亀石
 - 6 船石周辺の甕棺墓
 - 7 亀石（1号支石墓）と下部甕棺
 - 8 船石（2号支石墓）
 - 9 船石下部の祭祀遺構・竪穴
 - 10 鼻血石（1号墳）と下部石室
 - 11 鼻血石下部石室・蛇行状鉄剣出土状況
 - 12 2号墳墳丘と閉塞石
 - 13 2号墳石室・蛇行状鉄矛出土状況

- 14 3号墳全景・石室
- 15 基壇状遺構
- 16 南区及び船石下竪穴出土遺物、亀石下部甕棺
- 17 船石下祭祀遺構出土土師器
- 18 2号墳出土須恵器、3号墳出土土師器・須恵器
- 19 2号墳・3号墳出土鉄器
- 20 1号墳出土蛇行状鉄剣、2号墳出土蛇行状鉄矛、3号墳出土鉄剣

I 位置と環境

船石遺跡は佐賀県三養基郡上峰村大字 堤 字三本杉・二本谷の段丘先端付近(標高21m~25m)に位置する。

佐賀平野の東部、すなわち鳥栖市から佐賀郡にかけての脊振山麓では多くの洪積世段丘が発達しており、段丘に挟まれた谷底平野や扇状地性低地、南部有明海沿岸の三角洲平野は全国でも有数の穀倉地帯となっている。脊振山麓に発達する段丘群のうち、三養基郡中原町から神埼郡神埼町にかけては大小の段丘が幾つも山麓部から南へ舌状に長く延び、その分布は複雑で特異な景観を醸し出している。

上峰村は面積12.83km²で、脊振山地から南は筑後川旧河道付近までを占める南北に細長い村である。西は北部では東脊振村、南部では三田川町に接するが、この町村境が神埼郡との郡境となっており、東は中原町に接する。村域は西側を南へ横たわるように延びるいわゆる二塚山丘陵、東側を南へ延びる上地・船石丘陵に挟まれた地域である。

船石遺跡が位置する段丘は、西側を南流する切通川に沿って、脊振山地の鎮西山麓の塚原付近から南へ延び、船石集落の南長崎本線付近で平野部に没する。遺跡はこの段丘の先端付近に鎮座する船石天神宮周辺一帯に広がっている。

佐賀平野東部は県内において遺跡の分布が密なところで、特に弥生時代の著名な遺跡が目立っている。鳥栖市永安田遺跡⁽¹⁾、中原町矩方遺跡⁽²⁾、上峰村切通遺跡⁽³⁾、上峰村と東脊振村にまたがる二塚山遺跡⁽⁴⁾、東脊振村横田遺跡⁽⁵⁾、同村三津永田遺跡⁽⁶⁾、三田川町と神埼町にまたがる吉野ヶ里丘陵遺跡⁽⁷⁾などであるが、有明海沿岸に近い三角洲の微高地には千代田町詫田貝塚⁽⁸⁾など多くの集落が形成されている。これらの概要についてはそれぞれの報告に譲り、ここでは上峰村を中心として、東は寒水川流域から西は城原川流域までの山麓部・段丘・谷底平野・扇状地性低地の遺跡を中心に、船石遺跡をとりまく歴史的環境について概観したい。

旧石器時代の遺跡はこれまで本格的な調査がなされたものはないが、段丘上や斜面などから断片的に礫器や尖頭器、ナイフ形石器、剥片などが採集されている。縄文時代になると山麓部を中心に遺跡の数を増し、ほぼ全時期の縄文土器や石器類が発見されている。東脊振村戦場ヶ谷遺跡⁽⁹⁾は学史的に著名であるが、最近の発掘調査で明確な遺構が検出された遺跡もいくつか存在する。中原町香田遺跡⁽¹⁰⁾では早期の集石遺構や晩期の支石墓、壺棺墓が、東脊振村タヶ里遺跡⁽¹¹⁾や神埼町志波屋六本松遺跡⁽¹²⁾では後期の竪穴住居跡が検出され、この地域の縄文時代研究に新しい資料を提供したと言える。

弥生時代になると遺跡の規模、数ともに増大し、この地域はかつてない繁栄をみる。前期では山麓部・段丘上いくつかの遺跡が知られる。中原町南遺跡⁽¹³⁾では巨大なV字溝や貯蔵穴群が、上峰村一本谷遺跡⁽¹⁴⁾では多数の竪穴住居跡や貯蔵穴群が発掘され、前期末頃までには大き

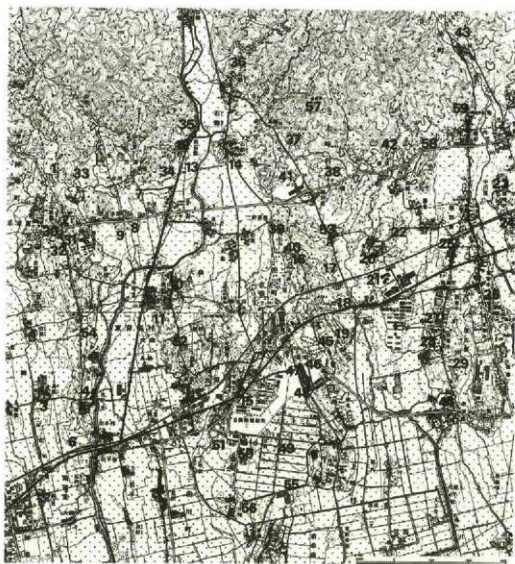


Fig. 1 船石遺跡の位置および周辺遺跡

1 戦場ヶ谷遺跡	13 西石動遺跡	25 ドンドン落遺跡	37 鎮西山南麓古墳群	49 稲荷塚前方後円墳
2 三津水田遺跡	14 下石動遺跡	26 町南遺跡	38 谷渡古墳群	50 塚山前方後円墳
3 馬郡遺跡	15 目達原銅矛出土地	27 天神遺跡	39 松葉古墳群	51 狐塚前方後円墳
4 吉野ヶ里丘陵遺跡群	16 二塚山遺跡	28 西寒水遺跡	40 東山古墳群	52 横田南前方後円墳
5 二本黒木遺跡	17 五本谷遺跡	29 宝満谷遺跡	41 屋形原古墳群	53 堤土懸跡
6 田手一本黒木遺跡	18 切通遺跡	30 伊勢塚前方後円墳	42 大塚古墳	54 辛上熊寺跡
7 タッ里遺跡	19 一本谷遺跡	31 下三津西前方後円墳	43 山田古墳群	55 塔の塚庚寺跡
8 西前田B遺跡	20 船石遺跡	32 志波屋開拓団古墳群	44 宝満宮前方後円墳	56 下中枕遺跡
9 西前田A遺跡	21 船石南遺跡	33 浦田遺跡	45 くづれ塚古墳	57 鎮西山城跡
10 横田・松原遺跡	22 上地遺跡	34 西一本杉遺跡	46 上のびゅう塚前方後円墳	58 臥牛城跡
11 松の森遺跡	23 郷方遺跡	35 西石動古墳群	47 大塚前方後円墳	59 駿河城跡
12 西石動銅戈溶范出土地	24 梶方原遺跡	36 山田谷古墳群	48 古稲荷塚古墳	

な集落が存在していたことがうかがえる。また前期の比較的早い段階から有明海沿岸の三角洲地帯の微高地に貝塚集落が出現していたことが千代田町詫田貝塚などの出土土器でわかる。中期になるとこの地域のほとんど全域に遺跡は広がり、いくつかの遺跡群を形成する。

この地域の弥生時代の遺跡としては特に墳墓群が従来より注目されてきた。切通、五本谷、二塚山、横田、三津永田、吉野ヶ里などの墓地からは甕棺墓や土墳墓・組合せ箱式石棺墓に伴って銅剣、銅鏡、鉄製武器・工具、ガラス製玉類、貝製腕輪などの重要な遺物を多数出土しており、漢式鏡だけでも20面以上を数えるなど、一つのまとまりを示す地域となっている。しかし姫方遺跡のように500基以上の甕棺墓を出土しながら副葬品が極めて貧弱な墓地も多数存在する。東脊振村西石動遺跡⁹⁵、同西前田B遺跡⁹⁶、神埼町志波屋六本松遺跡⁹⁷などである。

これらの弥生時代墓地はほとんどが段丘上に存在しており、今のところ墓地を営んだ集落との有機的な関連を結びつけられるものは極めて少ない。弥生時代集落跡の調査も近年の大型開発に伴って増加してきた。中原町姫方原遺跡⁹⁸、北茂安町宝満谷遺跡⁹⁹、上峰村一本谷遺跡、東脊振村西石動遺跡、同下石動遺跡¹⁰⁰、同西前田A遺跡¹⁰¹、同タヶ里遺跡などが発掘され、前記墓地群との関連もふまえて次第にこの地域の状況が明らかになりつつある。

また東脊振村西石動¹⁰²、佐賀市櫻の木¹⁰³では中広形銅戈の銚型が、三田川町目達原桜馬場遺跡¹⁰⁴からは中広形銅矛4本（うち2本は銚部に研ぎ分けによる羽状文がつく）が発見され、神埼町川寄遺跡周辺¹⁰⁵や千代田町詫田貝塚からは鏝型土製品が発見され¹⁰⁶、青銅器鑄造や祭祀のあり方が問題となってきている。

古墳時代になると、東脊振村西一本杉遺跡¹⁰⁷の初現的な古墳状の墳墓や、中原町姫方遺跡、上峰村五本谷遺跡などの方形周溝墓が出現し、神埼町下朝日古墳¹⁰⁸では仿製鏡や碧玉製石釧を、また上峰村四本谷では石棺から銅鏡などを出土¹⁰⁹するなど、本格的な古墳が築造されるようになる。さらに五世紀後半になると三田川町、上峰村、東脊振村にかけて前方後円墳7基、円墳5・6基以上からなる日達原古墳群¹¹⁰が出現し、この地域は政治的なまとまりを示すようになる。後期には山麓部、段丘を中心に中原町姫方、同上地、東脊振村下三津西、神埼町伊勢塚、同二子などの前方後円墳や、山麓部や高位段丘を中心に多くの群集墳が営まれる。中原町北部山麓地域の山田、白虎谷、一本桜・小武山・鳥巢古墳群、上峰村北部山麓地域の谷渡、奥の院、鎮西山麓部、屋形原古墳群、東脊振村山麓部の運田山、上石動、西石動、三津山田、戦場、松葉、東山古墳群、神埼町北部山麓部の三谷、志波屋六本松、花浦、朝日、猿獄古墳群などで、特に猿獄古墳群は猿獄塚とも呼ばれるように大規模な古墳群が形成されている。

古墳時代の集落で比較のまとまった調査が行われたものは少ない。三田川町下中杖遺跡¹¹¹、東脊振村下石動遺跡、同タヶ里遺跡、同西前田A遺跡、同浦田遺跡¹¹²、神埼町馬郡遺跡¹¹³などである。

奈良時代には下中杖、浦田遺跡などの集落跡も断片的に調査されているが、上峰村塔ノ塚廃

寺跡⁹²や東脊振村辛上齋寺跡⁹³が従来より注目され肥前風土記にある神埼郡僧寺一所の比定で議論的となってきたが、律令時代においてこの地域に、寺院を建立することができる勢力があったことを示すものとして注目される。また上峰村堤土屋跡⁹⁴も水城様の土屋として注目される。

平安時代にはこの地域の西半分は神埼荘と呼ばれる院領荘園に組み入れられるが、三田川町下中杖遺跡では越州窯陶磁器、綠釉陶器、木製馬鞍、青銅箸などの貴重な遺物を多く出土し、対中国貿易の拠点としての神埼荘と関係の深い遺跡と考えられる⁹⁵。他に平安時代末の輸入陶磁器を出土する遺跡がいくつか存在している。また東脊振村の靈仙寺跡⁹⁶における僧侶の活動が平安時代の後期に始まったことも、その出土遺物から知られるところである。

中世になると麓部域と総称される中原町北部から上峰村北部の諸山城周辺が東部佐賀平野の一大中心地となったようである⁹⁷。その一つ中原町臥牛城跡では確認調査⁹⁸の結果、腰曲輪をめぐらせた平坦面に濠、掘立柱建物等が検出され、輸入陶磁器などが出土している。東脊振村、神埼町にも多くの中世山城跡があり、平野部にも環濠の平城が多数存在している。また靈仙寺は最盛期を迎え、また平野部の集落跡からは多量の輸入陶磁器を出土している。三田川町下中杖遺跡、神埼町尾崎利田遺跡⁹⁹その他多くの遺跡で出土しており、輸入陶磁器がこの地域では広く一般にも普及していたことを想起させる。

参考文献

- 「上峰村史」上峰村史編纂委員会 1979
「東脊振村史」東脊振村史編纂委員会 1982
「神埼町史」神埼町史編纂委員会 1972
「佐賀県の遺跡」佐賀県教育委員会 1964
「佐賀県遺跡地図（三神地区）」佐賀県教育委員会 1979

註

- (1) 藤瀬慎博・石橋新次「柚比遺跡群範囲確認調査第3年次概要報告書」鳥栖文化財報告書第7集 1980
- (2) 木下巧・天本洋一「壘方遺跡」佐賀県文化財調査報告書第30集 1974
- (3) 金関丈夫・金関悠・原口正三「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』1961
- (4) 高島忠平・七田忠昭他「塚山遺跡」『二塚山』佐賀県文化財調査報告書第46集 1979
- (5) 木下元治「考古学〈弥生時代〉—神埼郡東脊振村横田遺跡」『新郷土』20-1 1967
- (6) 金関丈夫・坪井清足・金関悠「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』1961
七田忠志「東脊振三津の石蓋塚棺と内行花文明光鏡」佐賀県文化財調査報告書第2輯 1953
- (7) 七田忠志「其の後の佐賀県戰場ヶ谷遺跡と吉野ヶ里遺跡に就いて」人類学雑誌6-4 1934
- (8) 松尾慎作「詫田貝塚の研究」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告書第3輯 1932
- (9) 七田忠志「佐賀県戰場ヶ谷遺跡」史前学雑誌6-2・4 1934
- 90 高瀬哲郎・渠安信・久保伸洋「香田遺跡」佐賀県文化財調査報告書第57集 1981
- 91 久保伸洋「タヶ里遺跡」佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書Ⅰ 1983
- 92 昭和57年度神埼町教育委員会調査

- 03 天本洋一・七田忠昭「町南遺跡(佐賀県文化財調査報告書第68集) 1983
- 04 七田忠昭「一本谷遺跡」上峰村文化財調査報告書 1983
- 05 堤安信「西石動遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第4集 1981
- 06 久保伸洋「西前田B遺跡」東脊振村文化財調査報告書第6集 1982
- 07 昭和57年度佐賀県教育委員会調査
- 08 木下巧他「炬方原遺跡」佐賀県文化財調査報告書第33集 1976
 田平徳栄「炬方原遺跡B・C地区」中原教育委員会 1979
 多々良友博「炬方原遺跡E地区」中原町教育委員会 1980
 多々良友博「炬方原遺跡・F地区」中野建設・中野ハウジング 1981
 七田忠昭「炬方原遺跡G地区」中原町教育委員会 1982
- 09 東中川忠美「宝溝谷遺跡」北茂安町教育委員会 1980
- 08 高瀬哲郎「下石動遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第4集 1981
- 09 岩永政博・久保伸洋「西前田遺跡」東脊振村文化財調査報告書第5集 1981
- 0203 「鏡・玉・剣—古代九州の遺宝—」佐賀県立博物館 1979
- 04 七田忠昭「文様ある銅矛について」九州考古学№52 1976
- 05 天本洋一他「川寄吉原遺跡」佐賀県文化財調査報告書第61集 1981
 天本洋一・多々良多博「佐賀県川寄利田遺跡」『日本考古学年報』日本考古学協会 1980
- 06 詫田西分員塚からも2個出土している(昭和57年度、千代田町教育委員会調査)
- 07 松尾吉高「西一本杉遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第3集 1981
- 08 七田忠志「古代」『神埼町史』 1972
- 09 松尾慎作「目達原古墳調査報告」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第9輯 1950
- 08 七田忠昭・高山久美子・西田和巳「下中杖遺跡」佐賀県文化財調査報告書第54集 1980
- 09 堤安信「浦田遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第4集 1981
- 09 八尋実・緒方祐次郎「馬塚遺跡」神埼町文化財調査報告書第7集 1981
- 09 松尾慎作「塔の塚原寺址」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯 1970
- 04 七田忠志「肥前風土記神埼郡の條に於ける寺院に関する一察」上代文化13 1935
- 松尾慎作「東脊振村幸上庵寺跡の調査」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第5輯 1936
- 09 高島忠平・江一義「堀土屋跡」上峰村教育委員会 1978
- 06 註9と同じ
- 07 田平徳栄他「靈仙寺跡」東脊振村文化財調査報告書第4集 1980
- 08 「日本城郭史大系」新人物往來社 1981
- 08 1982年、中原町教育委員会、佐賀県教育委員会調査
- 08 天本洋一・原田保則 監「尾崎利田遺跡」佐賀県文化財調査報告書第55集 1980

II 調査の経過

1. 調査に至る経過

船石遺跡周辺は従来より石器や土器が散布し、また古墳も存在する地域として知られていたが、最も注意されていたのはやはり船石や鼻血石などと呼ばれる巨石群の存在であった。これらは神功皇后の伝説や肥前風土記にいう神埼郡船帆郷の記事に関連づけられていたが、戦後の支石墓研究の進展に伴い、これらの巨石群も支石墓の可能性があると考えられるようになった。松尾禎作は一連の支石墓研究を通して船石遺跡について次のように述べている。¹⁾

「今のところ佐賀県の有明海岸には、確実な支石墓は発見されていない。というよりも発掘調査して支石墓と確認されたものがないという方がより適切かもしれない……(中略)……船石は三養基群上峰村大字堤字船石部落の天満宮社殿の北にあるもので、神功皇后にまつわる伝説のある石である。

これは天満宮の神殿と拝殿に接して、長径1.7m、短径1.4m(露出面)の四方に4、5箇の支石らしい石が見える。故老達は少年の頃からこの上に乗ると鼻血が出ると云い伝えている。仮にこれを第一号と名づけて置く。この第一号の北方5、6mの所に東西に主軸を置いた巨石があって、舟形に見える。これを第二号とする。下に2箇の支石があり丁度畑のように見える。朝鮮金海にあるそれに似ていて、基盤式とはちがうが、若し地下に埋葬施設があるなら北九州唯一の卓子式と蕃盤式との折衷式のものといえる。石ヶ崎の掌石に似て上反りで、古墳の天井石とは反対であるから古墳ではないようである。……(中略)……

この石は長さ4m、幅2m位のもので須玖・石ヶ崎・朝田・小田第二号に匹敵するものである。北九州よりも中部九州の支石墓掌石が大型になり、数が少なくなり、年代が下るという一般的傾向に順応しているように見える。第一号・第二号とも発掘調査はされていない。」

しかし、その後約30年を経た今日まで調査は行われず解決をみないままであったが、昭和56年頃から地元船石区で船石天神宮の社地を児童公園や運動広場として利用したいという計画がもたれたため、村教育委員会は県教育委員会との協議の結果、諸施設の配置計画を立てるために予定地全域について確認調査を実施した。

2. 発掘調査の経過

発掘調査は事務局を上峰村教育委員会に設置して、昭和57年9月13日から同年12月24日まで現地調査を実施した。

調査組織

(事務局) 上峰村教育委員会

重松守男 教育長
納富正人 教育課長
吉田 忠 社会教育係長

(調査担当) 佐賀県教育委員会文化課

藤山 巖 課長
高島忠平 課長補佐
樋渡敏暉 文化財調査第1係長
七田忠昭 文化財保護主事(担当)
蒲原宏行 指導主事

(作業員)

秋山 巖(船石区長)・石丸 利・大坪 一・石松スミエ・石丸ミチエ・小川ミナ子・川原スミ子・川原ツヤ・北島八重子・堤 イシ・堤千恵子・堤 ユキ・古川ナオエ・古川シゲミ・矢動丸五十三・矢動丸敏子

石丸ミチエさんは基壇状遺構北半部の土地所有者で、6号・7号トレンチの発掘を快く承諾していただいた。また、久米トミ子・白水勝子・光武宣子の諸氏には北区の遺構実測について協力いただいた

調査経過 (Fig. 2)

昭和57年9月14日から4日間の調査予定地の雑木伐採に引き続き9月20日から重機による表土剥ぎを行った。9月28日、村教育委員会、文化課、作業員一同簡素な安全祈願を行い、発掘調査を開始した。

調査は天神宮境内を除いて、南区(約560㎡)と巨石群が存在する北区(約1,100㎡)に分けて行った。南区は10月14日に発掘が終了し、竪穴住居跡6軒をはじめ貯蔵穴、土壇、溝などが検出され、遺物としては弥生土器、石器等が出土した。南区は弥生時代の集落であることが判明し、甕棺等の出土はなかった。

北区は10月15日から12月24日の約2ヵ月間発掘を実施した。北区では調査前より社殿の北に接して船石、亀石、鼻血石と呼ばれる花崗岩の巨石や古墳の存在が知られていたが、全面的に表土を除いた段階で、甕棺墓を主体とする弥生時代墳墓約100ヵ所、竪穴住居跡3軒、破壊され

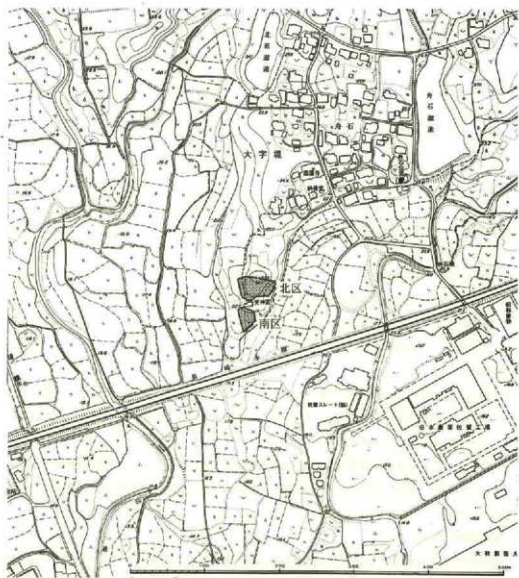


Fig. 2 船石遺跡周辺地形図

た古墳などを確認した。この段階で、調査費用、期間等を勘案した結果、巨石群の性格を明らかにすることに調査の主眼を置き、あわせて古墳や一部甕棺墓についても発掘調査を実施した。

以下、本報告書では紙数の制限もあり、南区については簡単に触れ、様々な興味ある遺構や遺物を出土した北区を中心にその成果について述べることにする。

註

- (1) 松尾雄作「佐賀県下の支石墓」佐賀県文化財調査報告書第4輯 1955

Ⅲ 南区の調査

1. 遺構 (折り込み1、PL. 3)

南区は、北は天神宮社殿付近に接し、南は村道、西は私有地に接する約560m²の区域である。調査区の東に接し、境内と村道に囲まれた三角形の区域にもトレンチを設けて調査したが、遺構は確認できなかった。なおこの区域は現在子供用の遊具が設置されている。

調査区内ではほぼ全面に遺構が分布しており、竪穴住居跡6軒、土壇14基（うち貯蔵穴と考えられるもの5基）、溝1条などが検出された。地形が南へ傾斜し、また調査前までは畑地として利用されていたため上部の削平がひどく、特に竪穴住居跡では南部の壁が遺存しないものがほとんどであった。

(1) 竪穴住居跡 (Tab. 1)

竪穴住居跡は形態的には平面形が円形のもの3軒（1号・3号・6号住居跡）と方形基調のもの3軒（2号・4号・5号住居跡）に分れる。これらのうち全域を確認できたものは1号住居跡のみであった。すべて弥生時代に属するものである。

平面円形の竪穴住居跡はほとんどが径4.60m～5.35mと5m前後の規模であるが、3号住居跡だけは径8.90mの大規模なものであった。6号住居跡は後世の破壊がひどく屋内の施設が不明であるが、1号住居跡と3号住居跡では中央部に炉状の土壇があり、この土壇の北東側と南西側に近接して柱穴状の小穴が存在する。また両者とも北西側壁付近には貯蔵穴と考えられる土壇が存在する。主柱穴と考えられる小穴は1号住居跡で5ヵ所(?)、3号住居跡で12ヵ所(?)確認したが、このことは住居の規模に柱穴数が対応する一般例と共通した傾向を示している。その他に3号住居跡では壁に接して小溝を巡らせている。

平面長方形と考えられる竪穴住居跡3軒はいずれも破壊がひどく、規模を推定することは不可能である。屋内施設としては2号住居跡で壁溝が検出された以外は不明である。4号住居跡ではほぼ中央部と考えられる床面に焼土が存在する。これら3軒の竪穴住居跡の棟方向は北から40°前後東へ振れているが、これは前述の1号・3号住居跡の炉状土壇の両側に位置する柱穴状の小穴を結ぶ線の方位とほぼ一致する。

(2) 土壇・貯蔵穴 (Tab. 2)

形態的には平面形が方形基調のもの和不整形のものに分かれる。方形基調のものはその形態等からいわゆる貯蔵穴と考えられるものがほとんどである。1号・2号・3号・4号・5号土壇などがこれにあたり、特に南部に集中する。平面長方形・方形に近い長方形・台形のものがあるが、面積は0.6m²～1.6m²と小規模なものがほとんどである。2号土壇は正方形に近く、規模も4.0m²と大きく南西壁に近く柱穴状の小穴が存在する。

6号土壌は長く幅が狭い溝状の土壌で、床面は北東側へ傾斜し、北東部は深さ1.41mと深く掘られている。性格は不明である。

平面が不整形な土壌もいくつか存在するが性格は不明である。11号土壌は円形に近い平面形であると考えられるが、内部から鉄製鋸先が出土した。

(3) 溝 跡

南部において北方向へ延び東へ屈曲する溝が存在する。南北約6.4m、東西約11.0mの部分で調査した。幅0.21~0.43m、深さ0.30~0.67mの幅の割には深い溝であり、床面は平面をなし、傾斜しない。北側溝には幅0.72mの平面円形の拡張部があり、この部分で溝はS字形に屈曲しているが、ここには拳大から人頭大の河原石が8個存在する。溝の内部からは多数の焼土塊とともに弥生土器片、中世の土師器片などが出土した。

Tab. 1 船石遺跡出土竪穴住居跡一覧表

() 内は推定法量

住居跡 番号	平面 形状	規 模 (m・㎡)		棟 方 向	屋 内 施 設		出土遺物	備 考		
		長さ(長形)×幅(短形)	深さ		床面積	主柱穴			溝・礎土・土嚢・その他	
1	円形	4.60×3.96	0.35	14.4	—	5?	—	伊状土嚢・土塊	変	3号土嚢より古
2	隅丸長方形	3.87以上× 2.98以上	0.23	—	N-37°-E	—	有	—	変・ 石包丁?	
3	円形	(8.90)	0.09	(62.2)	—	12?	有	伊状土嚢	変	
4	隅丸長方形	— × 3.66以上	0.20	—	N-44°-E	2?	—	礎土	変・礎・ 支脚	6号土嚢と切り合う
5	隅丸長方形	6.28× 2.00以上	0.10	—	N-38.5°-E	—	—	—	変・石灯	6号住居跡と切り合う
6	円形	(4.90)	0.10	(18.8)	—	—	—	—	変・礎	5号住居跡と切り合う
7	円形	(5.20)	—	(21.0)	—	—	—	—	—	北区、6・10・19号遺跡より古
8	円形	(5.15)	—	(21.5)	—	—	—	—	—	北区、遺跡範囲に切られる
9	円形	(5.35)	—	(22.5)	—	—	—	—	—	北区

Tab. 2 船石遺跡南区出土土嚢・貯蔵穴一覧表

土嚢 番号	平面形態	規 模 (m・㎡)			出土遺物	備 考
		長さ×幅	深さ	面積		
1	隅丸長方形	1.58×0.99	0.48	1.6	礎	貯蔵穴
2	長方形	2.17×1.90	0.51	4.0	礎・礎	貯蔵穴、正方形に近い、1号溝より古
3	長方形	0.81×0.79	0.63	0.6	礎・高坏	貯蔵穴、1号住居跡より新
4	長方形	1.21×0.80	0.35	1.0	礎	貯蔵穴、5号土嚢より新、1号溝より古
5	方形	1.08×1.00以上	0.12	—	礎	貯蔵穴、4号土嚢・1号溝より古
6	長方形	2.80×0.56	1.41	1.6	礎	溝状の土嚢、4号住居跡と切り合う
7	楕円形	2.30×2.01	0.81	3.7	礎	12号土嚢より新、近世～現代
8	不整形	3.83×2.50	0.37	—	礎・石鏝	近世～現代
9	不整形	3.60×2.12	0.30	—	礎	
10	楕円形	1.00以上×0.69	1.48	—	鉢	
11	円形?	径約4mか	0.49	—	鉄製鋸先	
12	不整形	1.72×1.22	0.26	—	礎	

2. 遺物

遺物としては土器、石器、鉄器などが出土した。出土数が少なく、特に土器は風化がひどく小破片となったものがほとんどであった。

(1) 土器 (Fig. 3 PL. 16)

土器は1～29はすべて弥生土器であるが、30のみ中世の土師器である。

竪穴住居跡出土土器 (Fig. 3、1～13)

1・2は1号住居跡出土。1は甕の口縁部で、断面逆L字形の幅広の平坦口縁である。2は甕の底部で、上げ底気味の平底をなす。復元底径5.4m。いずれも胎土は橙褐色で砂粒を含む。

3・4・5は2号住居跡出土。3・4は甕の口縁部で、断面逆L字形の平坦口縁である。胎土は3が黄褐色、4が茶褐色でいずれも砂粒を含む。5は甕の底部で、体部との境は丸くなる平底である。復元底径5.0cm。胎土は橙褐色で砂粒を含む。

6・7・8は4号住居跡出土。6は甕の口縁部で、断面逆L字形の平坦口縁は幅が狭い。胎土は茶褐色で砂粒を含む。7は甕の底部で、平底から体部は大きくひろく。底径5.6cm。胎土は橙褐色で砂粒を含む。8は土製支脚で、底部が広がる形態で横断面は楕円形となる。現存高7.2cm。胎土は橙灰色で大粒の砂粒を含む。

9・10は5号住居跡出土。9は甕の口縁部で、断面逆L字形の平坦口縁は薄くわずかに下方へ垂れる。10は甕の底部でわずかに上げ底気味の平底である。底径6.4cm。いずれも胎土は黄褐色で砂粒を含む。

11・12・13は6号住居跡出土。11・12は甕の口縁部で、どちらも断面逆L字形の平坦口縁であるが、11が幅が狭い。ともに胎土は橙褐色で砂粒を含む。13は甕の底部と考えられるもので、平底をなす外底部と大きくひろく体部との境は丸い。復元底径8.0cm。胎土は茶褐色でやや大粒の砂粒を含む。

土壇・貯蔵穴出土土器 (Fig. 3、14～27)

14は1号土壇出土。甕の口縁部で、やや内傾する体部に断面三角形口縁がつく。復元口径22.8cm。胎土は明黄灰色で砂粒を含む。

15・16は2号土壇出土。15は甕の底部で、平底をなすものと考えられる。復元底径6.0cm。胎土は暗茶灰色で砂粒を含む。16は甕の底部で、平底をなす外底部から体部は大きくひろく。底径6.4cm。胎土は橙灰色で砂粒を多く含む。2号土壇からは他に小型甕の頸部と考えられる小片が出土している。

17・18・19は3号土壇出土。17は甕の口縁部で、断面く字形に近い口縁である。胎土は黄褐色で砂粒を含む。18は甕の底部で、平底をなし体部との境は丸い。復元底径9.4cm。胎土は茶褐色(外底部は黒褐色)で砂粒を含む。19は高坏の口縁部と考えられる破片で、大きく外反する

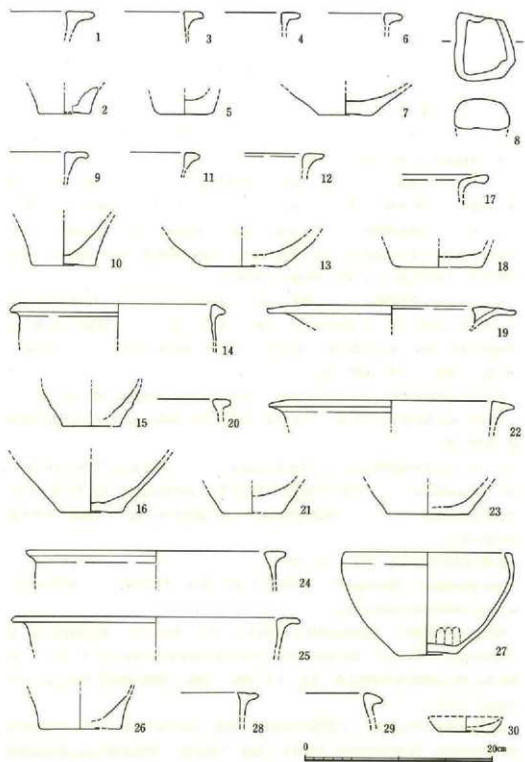


Fig. 3 船石遺跡南区出土土器実測図

体部上端内側を補強した断面鋸状の平坦口縁であり、外側は器壁が薄くわずかに下方へ垂れて
いる。復元口外径26.3cm。胎土は黄褐色で砂粒を含む。

20・21は4号土壙出土。20は壺の口縁部で、小さめの断面丁字形口縁の内外への張り出しは
小さい。胎土は橙褐色で砂粒を含む。21は壺の底部と考えられるもので、器壁の厚い平底をな
す。復元底径6.2cm。胎土は外面赤褐色（内面は黒ずむ）で砂粒を含む。

22・23は6号土壙出土。22は壺の口縁部で、断面三角形に近い逆L字形口縁である。復元口
外径26.0cm。胎土は橙灰色で砂粒を含む。23は壺の底部で、平底をなすものと考えられる。復
元底径8.6cm。胎土は橙灰色で砂粒を含む。

24・25・26は7号土壙出土。24・25は壺の口縁部で、24は内傾する体部に断面三角形に近い
逆L字形口縁がつき、25は直立する体部に断面逆L字形口縁がつく。復元口外径は24が27.6cm、
25が30.6cm。胎土はいずれも茶褐色で砂粒を含む。26は壺の底部で、平底をなす。復元底径8.4
cm。胎土は茶褐色で砂粒を含む。

27は10号土壙出土。碗形をなす鉢で、上げ底気味の底部からひろく体部は上位で内傾し、肥
厚させた端部をそのまま口縁とする。口径17.7cm、器高10.8cm、底径6.2cm。胎土は内面が橙灰
色、外面が明茶灰色で砂粒を含む。

溝跡出土土器 (Fig. 3, 28~30)

28・29・30は1号溝出土。28・29は流れ込みと考えられる壺の口縁部で、28は断面丁字形に
近い逆L字形口縁である。胎土は明黄灰色で砂粒を含む。29は内傾する体部に断面三角形の口
縁がつく。胎土は赤褐色で砂粒を含む。30は土師器小皿である。全面クロロナデで成形されて
いる。外底の調整痕は磨耗のため不明。復元口径7.9cm、復元高1.6cm。胎土は黄褐色で細か
な砂粒を含む。

(2) 石器 (Fig. 4 PL. 16)

石器には石鏃、柱状石斧、石包丁、
刮片、磨石などがある。

1は打製石鏃で、8号土壙出土。無
茎凹基式のものである。サヌカイト製。
現存長2.8cm、現存幅2.3cm、厚さ0.6cm。

2は縦長刮片で、裏探。長さ3.75cm、
幅1.4cm、厚さ0.8cm。黒曜石製。

3は砥石あるいは柱状の石斧と考え
られる破片で、2号住居跡出土。下部
の折れた部分で幅2.8cm、厚さ2.3cm。
現存長8.3cm。泥岩製かと思われる。

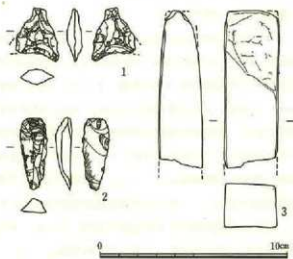
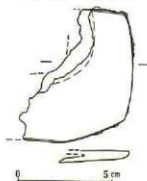


Fig. 4 船石遺跡南区出土石器実測図

他に2号住居跡から石包丁らしい破片、1号溝から磨石が出土している。

(3) 鉄器 (Fig. 5 PL.16)



鉄器としては11号土壇出土の鋤先がある。タテに2折した破片である。側辺と刃部との境は角ばり、刃部でもやや角ばる部分がある。全体は角ばったU字形をなし、刃部の反対側および側辺内側は袋になっている。現存幅6.0cm、全7.0cm、刃部と袋部上端までの幅3.7cmである。

Fig. 5 11号土壇出土鉄製鋤先実測図

IV 北区の調査

1. 遺構

北区は天神宮社殿以北の地域で、東は村道付近、北は古墳壇丘状の高まった部分までの約1,100㎡の区域である。表土剥ぎ終了時点で前述の3個の巨石の他に古墳2基、基壇状遺構1基、竪穴住居跡3軒、甕棺墓が主流と考えられる弥生時代墳墓の基壇93ヵ所以上などの遺構を確認したが、実際に発掘調査を実施したのは船石、亀石、鼻血石(1号墳)、2号墳、3号墳、基壇状遺構、船石周辺の甕棺墓19基などであった。

遺構の分布 (折り込み1)

天神宮神殿と拝殿との境の北側に接して鼻血石が、鼻血石の北北東に約3.5mの間隔をもって船石が、船石の東北東に約1.2mの間隔をもって亀石が存在する。また鼻血石とよく似た形態の石が亀石の北北東約10.5mの位置にあるが、今回は調査していない。調査区南端中央には2号墳が、中央部には3号墳が存在するが、両者の周溝は切り合っている。調査区北端には基壇状遺構がある。弥生時代墳墓の墓群は地形が緩やかに傾斜する西部と急傾斜となる東部においては数を減じるもののほぼ全域に分布するが、特に船石周辺、3号墳の西北方と東方の3つの区域に集中する傾向がある。しかし2号墳や3号墳下部は調査を実施しておらず、また北の基壇状遺構内部のトレンチ内でも甕棺墓が検出されるなどしたので、本来の分布状況は不明である。南区の住居跡群とともに集落を形成していると考えられる竪穴住居跡も西部において3基確認された。南から7号・8号・9号住居跡とした。

以下、発掘調査を実施した遺構について記述する。

(1) 甕 棺 墓 (折り込み2、PL. 6)

2号墳、3号墳側を除く船石周辺に存在する甕棺墓19基を発掘したが、これは船石の性格を知るためでもあった。19基の甕棺墓は成人用13基、小児用6基に分れる。ほとんどが棺として甕と甕、あるいは鉢と甕を組み合わせて内部に空間を保ついわゆる合せ口甕棺であるが、16号甕棺墓だけは板石を蓋として用いるいわゆる石蓋単棺であった。これらはほぼ南北方向に帯状に分布するが、北部では墓壇同志が切り合う例が少ないのに対し、南部では甕棺までも破壊するほど重複して営まれていた。また甕棺墓の分布上特に注目すべき点として、墓壇が船石の下に入り込まないことがあげられる。

甕棺内部から副葬品などの遺物は発見されず、また人骨についても16号甕棺墓から微細な破片が出土したのみであった。

以下、発掘した19基の甕棺墓についてその概要を記すが、発掘した甕棺は調査終了後取り上げていないので、二次墓壇(横穴・竪穴)は計測できず、いずれも推定値を記すことにした。

Tab. 3 船石遺跡北区甕棺墓一覧表

甕棺墓番号	甕棺形式	組合せ甕 (上・下)	成人・小児 用の別	墓壇の規模		方位	傾斜	備考
				長さ	幅×深(m)			
1	接口式	甕・甕	成人用	2.85	1.86×1.03	N-16°-E	-2°	粘土目張り 2号・3号と切り合う
2	接口式	甕・甕	小児用	1.78	1.00×0.76	N-49.5°-W	31°	1号と切り合う
3	接口式	甕・甕	小児用	1.70	1.62×0.89	N-84°-W	26°	粘土目張り 1号と切り合う
4	接口式	甕・甕	成人用	2.00	1.90×0.89	N-71°-W	4°	粘土目張り
5	接口式	鉢・甕	成人用	2.18	1.73×0.88	N-57°-W	4.5°	粘土目張り 墓壇内に甕棺墓が存在
6	接口式	甕・甕	小児用	——	——	N-61.5°-W	6°	5号と同時埋蔵か
7	接口式	鉢・甕	成人用	2.37	1.60×0.64	N-136°-E	27.5°	
8	接口式	甕・甕	成人用	2.16	1.53×1.05	N-117°-W	12°	粘土目張り 9号より古
9	接口式	鉢・甕	小児用	1.24	——×0.53	N-120°-W	22°	粘土目張り 8号より新
10	接口式	甕・甕	小児用	——	——×0.68	N-173°-W	9°	粘土目張り 11号より古
11	接口式	鉢・甕	小児用	——	——×0.39	N-129°-W	18°	粘土目張り 10号より新・12号より新
12	接口式	鉢・甕	成人用	1.85	1.65×1.06	N-127°-W	0°	粘土目張り 11号より古
13	挿入式	鉢・甕	成人用	1.52	——×0.98	N-112°-W	32°	16号より古
14	接口式	鉢・甕	成人用	——	——×0.51	N-122°-W	37°	粘土目張り 16号より古
15	接口式	甕・甕	成人用	——	——×0.79	N-117°-E	24°	16号より古
16	石蓋単棺	甕	成人用	2.02	推定 1.30×1.25	N-143°-W	44°	粘土目張り 13・14・15・17号より新、人骨片
17	接口式	甕・甕	成人用	1.60	1.40×1.03	N-97.5°-E	25°	16号より古
18	接口式	甕・甕	成人用	1.74	1.40×0.50	N-110°-E	6°	粘土目張り
19	接口式	甕・甕	成人用	1.78	1.07×0.49	N-25.5°-E	1°	

1号壙棺墓 (Fig. 6)

船石の北西約1.6mに位置する成人用壙棺墓である。長さ2.85m、幅1.86m、深さ1.03mの平面隅丸長方形の墓壇の主軸方向に沿って長さ2.15m、幅1.06m、深さ0.35mの竪穴を掘り込み壙棺を埋置する。壙棺は上下ともに大型壙を用いた接口式の複式棺で、接合部には粘土目張りを施す。傾斜角度は -2° とほぼ水平で、主軸方位はN-16°-Eである。2号・3号壙棺墓と墓壇の一部が切り合う。

2号壙棺墓

1号壙棺墓の西に接して位置する小児用壙棺墓である。長さ1.78m、幅1.00m、深さ0.76mの平面台形に近い隅丸長方形の墓壇の東壁南隅に長さ0.98m、幅0.46m、深さ0.35m、奥行き0.31mの横穴を掘り込み壙棺を埋置する。壙棺は上下ともに小型壙を用いた接口式の複式棺である。傾斜角度は 31° で、主軸方位はN-49.5°-Wである。1号壙棺墓と墓壇の一部が切り合う。

3号壙棺墓 (Fig. 6)

1号壙棺墓の西に接して、2号壙棺墓と並列して存在する小児用壙棺墓である。長さ1.70m、幅1.62m、深さ0.89mの平面正方形に近い隅丸長方形の墓壇の東壁中央に長さ0.93m、幅0.59m、深さ0.26m、奥行き0.28mの横穴を掘り込み壙棺を埋置する。壙棺は上下ともに小型壙を用いた接口式の複式棺で、下壙口縁部周辺から上壙を包み込むように粘土目張りを施す。傾斜角度は 26° で、主軸方位はN-84°-Wである。1号壙棺墓と墓壇の一部が切り合う。

4号壙棺墓

船石の北西約3.5m、3号壙棺墓の西に接して存在する成人用壙棺墓である。長さ2.00m、幅1.90m、深さ0.89mの平面正方形に近い墓壇の東壁中央やや北寄りに長さ1.68m、幅0.86m、深さ0.40m、奥行き0.43mの横穴を掘り込み壙棺を埋置する。壙棺は上下ともに大型壙を用いた接口式の複式棺で、接合部には粘土目張りを施す。傾斜角度は 4° と水平に近く、主軸方位はN-71°-Wである。3号壙棺墓と墓壇の一部が切り合う。壙棺は土圧により崩壊している。

5号壙棺墓 (Fig. 6 PL.6)

船石の西方約0.6mに位置する成人用壙棺墓である。長さ2.18m、幅1.73m、深さ0.88mの平面隅丸長方形の墓壇の東壁南隅に長さ1.81m、幅1.01m、深さ0.36m、奥行き0.54mの横穴を掘り込み壙棺を埋置する。壙棺は大型壙(下)と大型鉢(上)を用いた接口式の複式棺で、接合部には粘土目張りを施す。傾斜角度は 4.5° と水平に近く、主軸方位はN-57°-Wである。墓壇内に6号壙棺墓(小児棺)が存在する。

6号壙棺墓 (Fig. 6, PL. 6)

5号壙棺墓の墓壇内に存在する小児用壙棺墓である。発掘された他の5基の小児用壙棺が比較的大きな墓壇に埋置されていることや、5号壙棺墓の墓壇に乱れがないことなどから、5号壙棺と同時に埋置された可能性が高い。壙棺は上下ともに小型壙を用いた接口式の複式棺であ

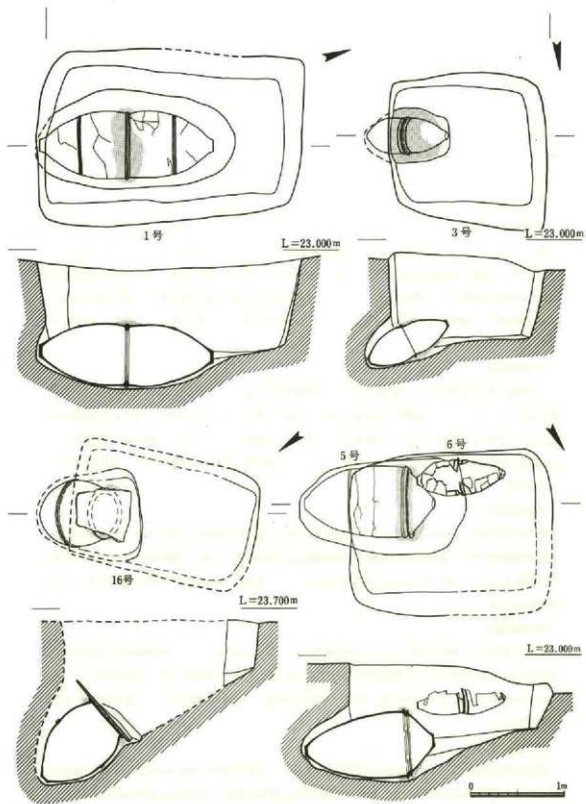


Fig. 6 船石遺跡北区甕棺墓実測図

る。傾斜角度は6°と水平に近く、主軸方位はN-61.5°-Wである。

7号壔棺墓

船石の西方約2.3mに位置する成人用壔棺墓である。長さ2.37m、幅1.60m、深さ0.64mの平面隅丸長方形の墓壇の西壁中央に長さ1.32m、幅0.92m、深さ0.63m、奥行き0.37mの横穴を掘り込み壔棺を埋置する。壔棺は大型壔（下）と大型鉢（上）を用いた接口式の複式棺である。傾斜角度は27.5°で、主軸方位はN-136°-Eである。8号壔棺墓と墓壇の一部が切り合う。壔棺は土圧により崩壊している。

8号壔棺墓

船石の西方約1.0mに位置する成人用壔棺墓である。長さ2.16m、幅1.53m、深さ1.05mの平面長方形の墓壇の北東壁中央に長さ2.18m、幅0.91m、深さ0.45m、奥行き0.83mの横穴を掘り込み壔棺を埋置する。壔棺は上下ともに大型壔を用いた接口式の複式棺で、接合部には粘土目張りを施す。傾斜角度は12°と水平に近く、主軸方位はN-117°-Wである。墓壇の上部を9号壔棺墓により切られる。

9号壔棺墓

8号壔棺墓の墓壇を切って埋置された小児用壔棺墓である。長さ1.24m、深さ0.53mの平面隅丸長方形と考えられる墓壇の北東壁に深さ0.20m、奥行き0.24mの横穴を掘り込み壔棺を埋置する。壔棺は中型壔（下）と口縁部を打ち欠いた大型鉢（上）を用いた覆口式の複式棺で、接合部には粘土目張りを施す。傾斜角度は22°で、主軸方位はN-120°-Wである。壔棺は土圧により崩壊している。

10号壔棺墓

船石の南西約2.3mに位置する小児用壔棺墓である。墓壇の規模は不明である。壔棺は上下ともに小型壔を用いた接口式の複式棺で、接合部には粘土目張りを施す。傾斜角度は9°と水平に近く、主軸方位はN-173°-Wである。壔棺は土圧により、また11号壔棺埋置の際の掘り込みにより崩壊している。

11号壔棺墓

船石の南西約1.4mに位置する小児用壔棺墓であり、10号壔棺および12号壔棺墓の墓壇の一部を破壊して埋置されている。墓壇の規模は不明である。壔棺は中型壔（下）と小型鉢（上）を用いた接口式の複式棺で、接合部には粘土目張りを施す。傾斜角度は18°で、主軸方位はN-129°-Wである。

12号壔棺墓

船石の南西に接して存在する成人用壔棺墓である。長さ1.86m、幅1.65m、深さ1.06mの平面長方形の墓壇の北東壁に長さ1.54m、幅0.88m、深さ0.36m、奥行き0.48mの横穴を掘り込み壔棺を埋置する。壔棺は大型壔（下）と大型鉢（上）を用いた接口式の複式棺で、接合部に

は粘土目張りを施す。傾斜角度は水平で、主軸方位はN-127°-Wである。11号甕棺墓により墓墳を切られる。甕棺は土圧により崩壊している。

13号甕棺墓

船石の南西に接して存在する成人用甕棺墓である。長さ1.52m、深さ0.98mの平面隅丸長方形と考えられる墓墳の北東壁北西隅に長さ1.45m、深さ0.42m、奥行き0.50mの横穴を掘り込み甕棺を埋置する。甕棺は大型甕（下）と大型鉢（上）を用いた挿入式の複式棺で、接合部には粘土目張りを施す。傾斜角度は32°で、主軸方位はN-112°-Wである。16号甕棺墓により墓墳を切られる。

14号甕棺墓

船石の南西約2.0mに位置する成人用甕棺墓である。墓墳は南東側で一部壁が検出されたのみ（深さ0.51m）で全体の規模は不明である。北東壁に長さ1.49mの横穴を掘り込み甕棺を埋置したものと考えられる。甕棺は大型甕（下）と大型鉢（上）を用いた接口式の複式棺である。傾斜角度は37°とつよく、主軸方位はN-122°-Wである。16号甕棺墓により墓墳が切られている。甕棺は土圧により崩壊している。

15号甕棺墓

船石の南西に接して存在する成人用甕棺墓である。墓墳は北東側で一部壁が検出されたのみ（深さ0.79m）で全体の規模は不明である。甕棺は上下ともに大型甕を用いた接口式の複式棺である。傾斜角度は24°で、主軸方位はN-117°-Eである。16号甕棺墓により甕棺までがひどく破壊されている。

16号甕棺墓 (Fig. 6)

船石の南西約0.8mに位置する成人用甕棺墓で、発掘した甕棺墓19基の中でただ一基の石蓋単棺であり、時期的にも最も新しいものである。長さ2.02m、推定幅1.30m、深さ1.25mの平面隅丸長方形と考えられる墓墳の北東壁に長さ1.12m、幅0.98m、深さ0.53m、奥行き0.37mの横穴を掘り込み甕棺を埋置する。甕棺には大型甕を用い、蓋として長さ0.86m、幅がそれぞれ0.54m、0.35mの台形を呈した厚さ3.5cmの玄武岩系の板石を用いており、接合部には粘土目張りを施す。傾斜角度は44°とつよく、主軸方位はN-143°-Wである。13号・14号・15号・17号甕棺墓を切って営まれている。棺内から微細な人骨片が出土した。

17号甕棺墓

船石の南約1.3mに位置する成人用甕棺墓である。長さ1.60m、幅1.40m、深さ1.03mの平面正方形に近い長方形の墓墳の南西隅に推定奥行き0.70mの横穴を掘り込み甕棺を埋置したものと考えられる。甕棺は上下ともに大型甕を用いた接口式の複式棺である。傾斜角度は25°で主軸方位はN-97.5°-Eである。16号甕棺墓により墓墳の一部が切られる。土圧により甕棺は崩壊している。

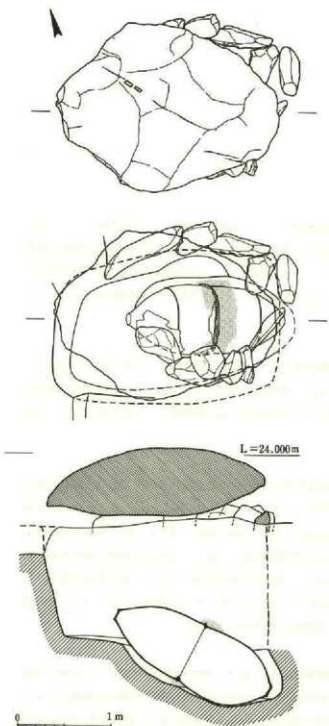


Fig. 7 船石遺跡
1号石基(亀石)実測図

18号壘棺墓

船石の北西約6.0mに位置する成人用壘棺墓である。長さ1.74m、幅1.40m、深さ0.50mの平面隅丸長方形の墓壇の北西壁南西寄りに横穴を掘り込み壘棺を埋置している。壘棺は上下ともに大型礎を用いた接口式の複式棺で、接合部には粘土目張りを施す。傾斜角度は6°と水平に近く、主軸方位はN-110°-Eである。土圧により壘棺は崩壊している。

19号壘棺墓

18号壘棺墓の北東に接して存在する成人用壘棺墓である。長さ1.78m、幅1.07m、深さ0.49mの平面楕円形の墓壇に壘棺を埋置する。壘棺は上下ともに大型礎を用いた接口式の複式棺である。傾斜角度は1°とほぼ水平で、主軸方位はN-25.5°-Eである。

(2) 支石墓

支石墓としては、1号支石墓(亀石)と2号支石墓(船石)が存在する。他に3号墳東側周溝付近に位置する長さ約3.0m、幅約1.3m、推定厚0.5mの大石も支石墓の可能性が有る。

1号支石墓(亀石) (Fig. 7, PL. 7)

船石の東北東に約1.2mの間隔を保って通称亀石が存在する。この位置は後に述べる2号墳(円墳)

の墳丘内部にあたる場所である。

上部施設としては、下部壔棺墓墳の掘り込み際に長さ0.35m～1.00mの花崗岩の河原石10個が平面コの字形に配置され、上石として長さ2.46m、幅1.82m、厚さ0.72mの亀甲形を呈する花崗岩の大石(亀石)が置かれている。なおこの亀石の上部には、後世この石を割ろうとしたのか深さ数mmの溝と2ヵ所に矢跡が遺存している。

下部は推定長2.23m、推定幅1.64m、深さ1.34mの平面楕円形に近い隅丸長方形の墓墳の東壁に長さ1.72m、幅0.97m、深さ0.66m、奥行き0.18mの横穴を掘り込み成人用壔棺を埋置する。壔棺は上下ともに大型壔を用いた接口式の複式棺で、接合部には粘土目張りを施す。傾斜角度は26°で、主軸方位は亀石の長軸方位とほぼ同じN-72.5-Wである。

なお上壔の体部下位は、おそらく上部施設の支石の一つと考えられる長さ0.59mの河原石で破壊されているが、このことは壔棺墓墳の南壁に後世の掘り込みがあることと深く関係するものと考えられる。壔棺内部には堅く締った土が充満していた。

この一号支石墓は松尾禎作による調査の際は確認または注意されていないものである。

2号支石墓(船石)(Fig. 8・9, PL5・8・9)

船石天神宮拝殿の北方約4.0mの位置に通称船石が存在する。

船石は長さ5.41m、幅3.12m、厚さ1.12mの舟形をなす花崗岩の巨石である。上面は北西舳先側で反り上がり、底面も舳先側で舟底形となり、船石と呼ぶにふさわしい形態であるが、全体的には南へ傾いている。船

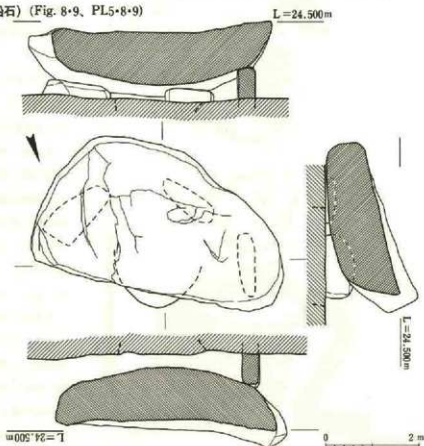


Fig. 8 船石遺跡2号支石墓(船石)実測図

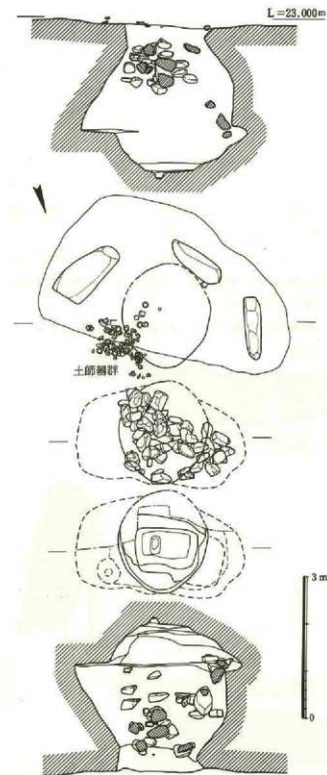


Fig. 9 船石遺跡2号支石基下部堅穴実測図

先の下部および西南部、東南部下部の3ヵ所を、北東方向にひらくコ字形に似た位置で花崗岩の大石が支えている。舳先側の石は長さ1.33m、厚さ0.35m、高さ0.66m以上、南西部の石は長さ1.32m、厚さ0.46m、高さ0.56m以上、南東部の石は長さ1.50m、厚さ0.74m、高さ0.30m以上といずれも大きな石である。これらの支石は、下部を調査しなければ不明である南東側支石を除く2個の支石は横位置に立てられている。

船石の下部では表土を除去したところで、南東側支石の北西約1.2mを中心として径約1.5mの範囲内で、中世の土師器の埴や小皿が約千点検出された。後に述べる下部の堅穴の北東側掘り込み際に特に集中する。これらは当時の地表面と船石底面との空間に置かれたか投げ入れられたものらしい。巨石船石を信仰の対象とした祭祀行為の痕跡かと考えられる。

さらにこの土師器群を取り除いたところで巨大な堅穴が検出された。上面は南北2.20m、東西1.89mの平面円形に近い楕円形の掘り込みで、3個の支石にあたらぬ位置に設けられている。調査は危険を避けるため南

側を残して進めたので、この堅穴の全体の構造・規模は明確にすることができなかったが、深さ2.30m付近で東西に3.57mといわゆる袋状に最も広がり、南北方向へは上面から広がらないようである。最も広くなるところでは東側で平坦面となり、西側では横穴状になる。この東側平坦面には北寄りの部分に径0.45m～0.55m、深さ約0.5mの平面円形の小穴が存在する。この巨大な堅穴は最下部までの深さは3.30mであるが、最下部には長さ1.36m、幅0.86m、深さ0.20mの平面隅丸長方形の墳があり、この墳の床面東寄りにはさらに長さ0.40m、幅0.22m、深さ0.14mの平面楕円形の掘り込みがある。

堅穴の内部には埋土に混って、深さ0.3m～2.5mの範囲に10cm大から60cm大の花崗岩の河原石が約60個存在した。これらは分布状態から、意識的に配置されたものとは考え難い。埋土からは弥生土器片や石鏃などを出土したが、深さ1.2mと2.1mの位置からはそれぞれ鉄鏃と大型壺棺片を出土した。埋土は上位では上ぶくらのレンズ状にセメント状の堅く締った灰色砂質土と暗黒褐色土が交互に10層程度堆積しており、下位では水平に砂質土や砂が堆積していた。土層の堆積状態から、この堅穴は自然に埋没したものではなく、特に上位においては堅く締りながら丁寧に土を埋めたものと考えられる。

この2号支石墓は松尾楨作の調査の際の2号（支石墓）である。

(3) 古墳

古墳としては1号墳（鼻血石）、2号墳、3号墳が存在する。

1号墳（鼻血石）(Fig. 10, PL. 5・10・11)

天宮宮の神殿と拝殿との境の北側に接して存在する通称鼻血石を天井石とする石室が1号墳の主体部である。周溝や墳丘などは確認できなかった。

石室は長方形に近い狭長な平面形をなす堅穴系横口式石室である。石室の規模は床面で長さ1.98mであるが、幅は奥壁側で0.72m、横口部側では0.60mと狭くなるが、石室中央部付近で幅0.85mと最も広い。床面から天井石までの高さは中央部で0.61m、奥壁部分で0.65mである。石室の主軸方位はN-76.5°-Wで、ほぼ西側に横口部を設けている。

壁体は長側壁、奥壁とも花崗岩の塊石を主に用いているが、石室内面で面を揃え、4段ないし5段にわたって平積みし、間隙には玄武岩系の板石を埋め込んでいる。塊石は長さ30cm～50cm程度のものを多く用いるが南側壁最下段には長さ70cm以上の石を2個用いている。天井部は長さ3.16m、幅1.68m、厚さ0.54mの大きな一枚石を架構する。この大石が乗れば鼻血が出るという伝えられる通称鼻血石であり、松尾楨作の1号（支石墓）である。天井石は下部石室との間隙が大きいことや、石室に対して位置がややズレていることなどから以前多少動かされていたものと考えられる。

横口部は、北側に大きめの、南側に小さめの塊石を立て袖石としている。袖石に挟まれた横口の幅は床面で35cmである。横口部は大きめの塊石3個を主体とした20数個の塊石で閉塞され

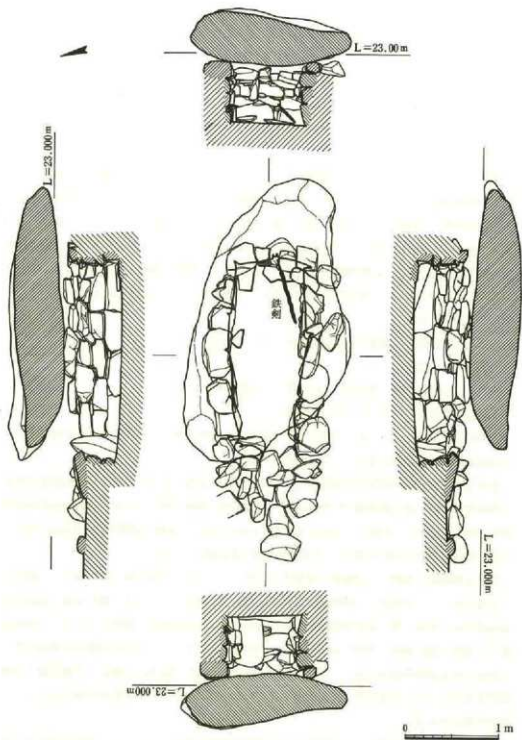


Fig. 10 船石遺跡1号墳(鼻血石)石室実測図

ている。

石室内には奥壁部と北側壁中央の床面に3枚の板石を敷くが、奥壁側の2枚は、下部に埋置されている礎石にあいた穴を塞いでいる。副葬品としては南側壁床面に鉦を向けた蛇行状鉄剣が奥壁中央に立てかけられた状態で出土した。他に遺物は皆無である。

2号墳 (Fig. 11・12・13 PL. 12・13)

北区の南端ほぼ中央に位置する横穴式石室を内部主体とする径約12m、高さ2.5mの円墳である。墳丘の南側は天神宮境内となっており削平されているが、この部分にも周溝が遺存している。2号墳は墳丘測量ならびに石室内部と北東側周溝についての発掘を実施した。

周溝は最大幅3.6m、深さ0.45mの緩やかに傾斜するU字形の掘り込みである。北では3号墳周溝で切れ、南側では境内を巡り船石の南で終わっているようである。玄門付近の土層から察すると墳丘は細かく丁寧な積み上げを行っているようである。

石室は長方形の狭長な平面形をなす古式の横穴式石室で、亀石や船石を意識したのか墳丘中央から北東に著しく寄って設けられている。盗掘の痕跡は全くない。玄室の床面での規模は長さ2.75m、幅1.48m～1.58m、高さ1.52m～1.67mである。主軸方位はN-49°Wで、北西側に開口する。側壁は北東側には長さ2.75m以上、高さ1.70m以上の花崗岩の1枚石を用いているが、上部が内側へせり出してい

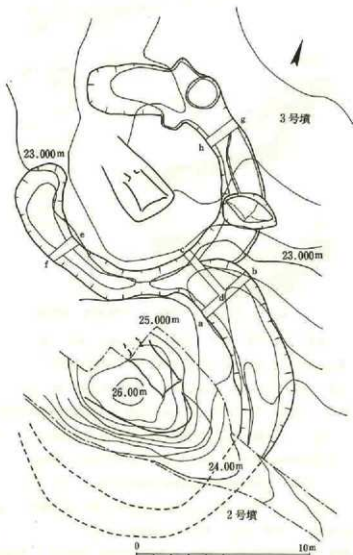


Fig. 11 船石遺跡2号墳・3号墳実測図

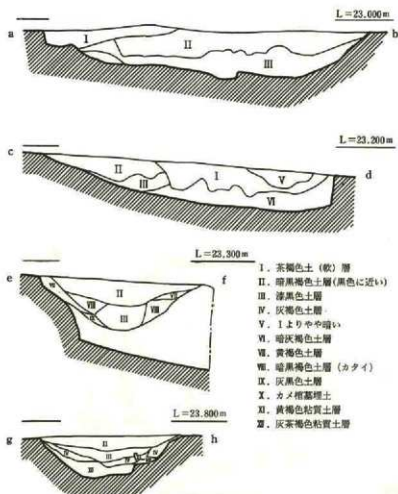


Fig. 12 船石遺跡2号墳・3号墳周溝土層断面図

る。奥壁と南西側壁にはそれぞれ1個の花崗岩の腰石を据え、上に花崗岩の塊石を平積みする。塊石の中には片岩系の石も少数含まれる。南西側壁は長さ2.40m以上、高さ1.0m以上の一枚石の腰石の上に長さ10cm~130cmの塊石を不規則気味に積み上げるが、奥壁は長さ1.25m、高さ0.7m以上の腰石の上に長さ10cm~50cmの塊石を7段程度比較的整然と積み上げている。天井部には3枚の石を架構するが、両長側壁に約20cmの高低差があり南へ傾いている。

玄門は両側に長さ約1.3mの柱状の石を床面に立て両袖石とするが、北東側袖石は玄室内へ倒れている。この両袖石の間隔は約0.85mであったと考えられるが、この間には樞石がある。樞石上面から天井までの高さは1.10mで、樞石上面と玄室床面との高低差は約0.3mである。前庭部両側壁は、平積みされた塊石により両壁をなすものとみられるが、下位には塊石は存在しない。前庭部から玄室にかけての上部には2枚の天井石が存在する。閉塞は玄門前面に長さ0.9m、幅0.7m、厚さ23cmの塊石を横位置に立てかけ、さらに前庭部の天井石周辺を約40個の塊石で塞いで

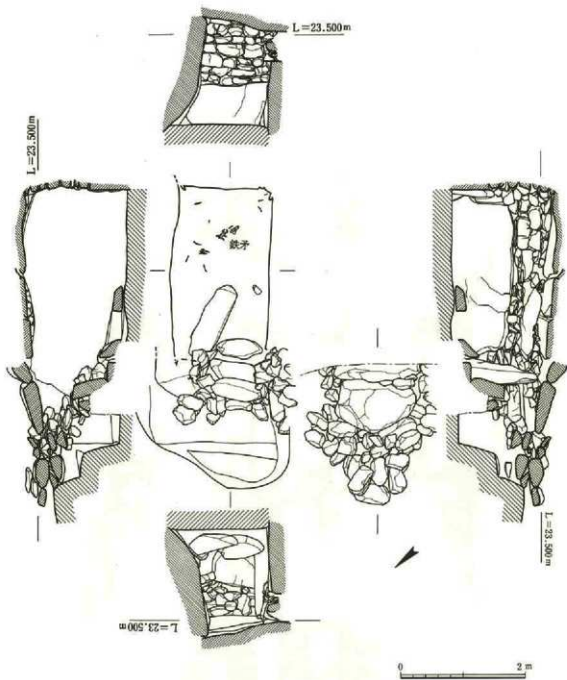


Fig. 13 船石遺跡2号墳石室実測図

いる。

副葬品としては玄室床面北寄りから蛇行状鉄矛と鉄鍬、南隅から刀子、中央北東寄りから螺旋状鉄棒片が集中して出土したが、弥生時代の磨製石斧片も混って出土した。また閉塞部上部から須恵器高坏が、周溝内からは鉄弁や須恵器が出土した。

3号墳 (Fig. 11・12・14, PL. 14)

北区のほぼ中央部に位置する横穴式石室を内部主体とする径約9mの円墳である。戦後の開墾により破壊されたことが判明している古墳である。墳丘や石室上部はこの開墾によりすべて削平されており、石室に用いられたと考えられる塊石は玄室内へ崩れ落ちていたり、船石北側

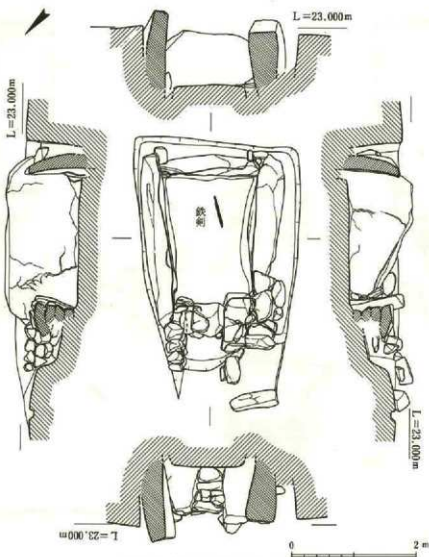


Fig. 14 船石遺跡3号墳石室実測図

に集められたりしていた。

周溝は平面馬蹄形に巡っており最大幅3.0m、深さが最大0.56mの緩やかに傾斜する断面U字形の掘り込みである。

石室はいわゆる平面羽子板形をなす古式の横穴式石室で、長さ3.65m、奥壁側での幅2.55m、玄門側での幅2.00mの平面台形の竪穴の内部に構築されている。石室の規模は床面で長さ2.05mであるが幅は奥壁側で1.57m、玄門側で1.30mとやや狭くなる。主軸方位はN-43.5°-Wで、北西側に開口する。壁体は3方ともに花崗岩の1枚石が腰石として用いられている。北東側壁には長さ約2.80m、高さ1.20m以上の、奥壁には長さ約1.60m、高さ0.90m以上の、南西側壁には長さ2.23m、高さ1.05m以上の大きな平石がそれぞれ用いられている。

玄門は両袖に長さ1.20m以上と1.40m以上の柱状の石を床面から立てて両袖石とする。袖石間の間隔は床面で約0.40m、上位で0.50mとなり、床には榫石がある。榫石上面から南西側袖石上端までの高さは0.60m、榫石上面と玄室床面との高低差は約20cmである。前庭両側壁のうち北西壁は長さ15cm~45cmの塊石が比較的整然と平積みされているが南西壁側の積み石は乱れている。閉塞は両袖石の間の榫石上に3個の塊石を平積みして行われている。なお玄室内面には紅柄と思われる赤色顔料が塗布されている。

副葬品としては玄室中央部南東寄り、鉦を西北西に向けた鉄剣が、床面から約5cm浮いた状態で出土した。他に玄室内埋土に混って鉄鎌の茎部片、須恵器の甕や壺が、北東部周溝内から須恵器の坏や高坏、鉄製刀子が、前庭部前面から土師器の坏が出土した。

(4) 墓壇状遺構 (Fig 15-16-17 PL. 15)

北区の北端ほぼ中央に北西から南東に約32m、北東から南西方向に約17mの平面楕円形に近い長方形をなし、高さ約2mの墳丘状の高まり(標高25.8m)が存在する。

南側裾部に5ヵ所(南東から1号・2号・3号・4号・5号)、丘中央部から北東へ(6号)・南東へ(7号)の計7ヵ所のトレンチを設定して調査した。これらのうち2号、3号・4号・5号トレンチでは石列が出土した。この石列はN-62°-W方向に一列に並ぶ一連のもので、2号トレンチ東部(この付近の石列には乱れがある)から西は5号トレンチの石列西端から直角に北方向へ続く。北への続きはボーリング調査により6mまでは確認した。

石列は主に長さ20cm~30cm前後の花崗岩の塊石を2~3段平積みした部分が多く、南側に側面を揃え、大まか標高25.2mの高さから上に積んでいる。3号トレンチには倒れかかった長さ1.0m、幅0.42mの大石が存在するが、この付近では石積みが厚く丁寧なつくりとなっている。

石列に囲まれた内部は、標高約25mの高さで地山を整形し(7号トレンチではこの高さで墓棺を削平している)、盛土を行ったらしい。3号トレンチ東壁の土層をみると、石列の内側は版築状に丁寧に土を積み上げており、外側には溝状の部分も存在する。

先の倒れかかった大石付近の位置から石列方向と直角方向の南南西24mの位置には船石が、

31mの位置には鼻血石が存在しており、これら巨石との関連も考えられる。ちなみに船石の直線的な北側縁の方位も、石列方向と全く一致している。

遺物としては盛土の下部から弥生時代中期の甕棺片多数、上部から須恵器大甕片1が出土した。

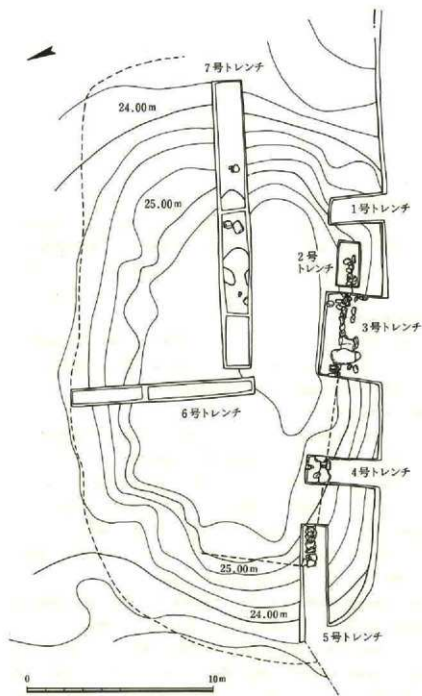


Fig. 15 船石遺跡基壇状遺構実測図

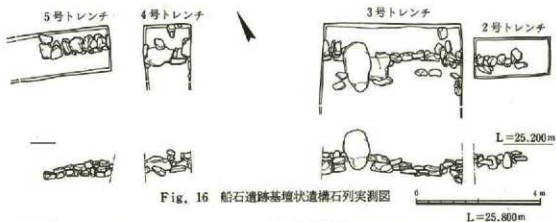
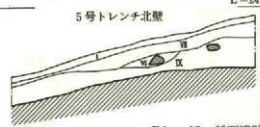
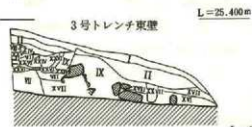
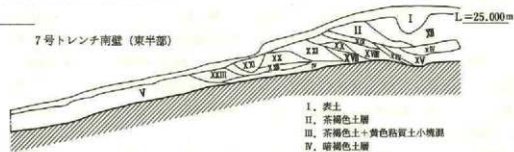
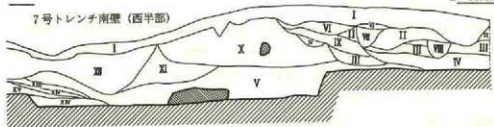


Fig. 16 船石遺跡基壇状遺構石列実測図



- I. 表土
- II. 茶褐色土層
- III. 茶褐色土+黄色粘質土小塊混
- IV. 暗褐色土層
- V. 黄褐色砂質土層
- VI. 黒色土層
- VII. 暗茶褐色土層
- VIII. 茶色土層
- IX. 茶色砂洗土層
- X, IV. (やや砂質)
- XI, V. (小礫混り)
- XX, II. (やや砂質)
- XIII. 黄褐色粘質土層
- XIV. 暗黒褐色土層
- XV. 黄灰色砂層
- XVI. VII. (カタイ)
- XVII. 黒褐色土層
- XVIII. 黄褐色土層
- XIX. 暗灰褐色土層
- XX. VI. (軟)
- XXI. VI. (やや褐色気味)
- XXII. 黄褐色土層
- XXIII. 暗灰褐色土層
- XXIV. VII+黄褐色粘土ブロック混
- XXV. 黄灰色超砂層
- XXVI. 黄褐色土層
- XXVII. 黒茶色土層
- XXVIII. II+黄灰色粘土ブロック混
- XXIX. VII. (軟)
- XXX. XVII. (軟)

Fig. 17 船石遺跡基壇状遺構土層断面図

2. 遺物

北区の遺物としては甕棺墓や支石墓の埋葬主体として用いられた弥生土器、船石直下出土の中世土師器、船石下部堅穴内出土の弥生土器・石器・鉄器、古墳出土の土師器・須恵器・鉄器などがある。

(1) 甕棺 (埋葬に用いられた土器) (Fig. 18-19 Tab. 4 PL. 16)

発掘した19基の甕棺墓と1号支石墓から出土した39個体分の弥生土器がある。支石墓下の甕棺以外は取り上げていないので細かな観察はできない。

(i) 大型甕 22個体出土した。

大型甕A 砲弾形の器体に、小さな断面T字形口縁がつくもので、器体上位が直立するもの(Aa…4号上・下、15号上・下、18号上・下、19号下)と内傾するもの(Ab…17号上・下、19号上)に分かれる。いずれも胴部に細かな断面三角形突帯が1条または2条つくが、口縁部下にはつかない。器高は小さな19号を除けば79cm~87cm、口縁の幅4.3cm~5.6cm。

大型甕B 砲弾形の器体に、内側への張り出しがつよく大きな断面T字形突帯がつくもので、すべて胴部に2条の断面三角形突帯がつく。突帯は約半数の割合いで大きめのものと細かめものに分れる。器高は91cm~107cmと大形であり、口縁部の幅も6.2cm~8cmと大きくなる。口縁部下に突帯がつかないもの(Ba…1号上・下、8号上・下、13号下、14号下)と2条の細かめの断面三角形突帯がつくもの(Bb…12号下)に分れる。1号支石墓の甕棺は上下ともこの大型甕Baである。上甕は器高90.0cm、口外径72.4cm、下甕は器高99.2cm、口径73.8cmで、内外面ともナデ調整。

大型甕C 上位がやや内傾する砲弾形の器体に、内側への張り出しが厚くつよいが、外側への張り出しも厚い断面T字形口縁がつくもの(5号下)である。口縁上面は外側への傾斜がつよい。胴部に大きめの断面三角形突帯が2条つく。器高は110cmと大型である。

大型甕D 大型甕Bと似た器体に、内外への張り出しがつよい断面T字形口縁がつき、口縁部下に1条、胴部に2条の大きめの断面三角形突帯がつくもの(7号下)である。器高98cm。

大型甕E 截頭卵形の器体に、厚めの断面逆L字形口縁がつき、口縁部下に幅広い断面三角形突帯が1条、胴部に断面コ字形突帯が2条つくもの(16号)である。器高93cm。

(ii) 中型甕 2個体出土した。

中型甕A 截頭卵形の器体に、内側への張り出しがつよい断面T字形口縁がつくが、外側への張り出しが細かで、胴部につく2条の断面三角形突帯も細かなもの(9号下)である。器高62cmで、小児用の甕棺として利用されたものと考えられる。

中型甕B 中型甕Aと似た器体につく断面T字形口縁は外側への張り出しも大きく、胴部に

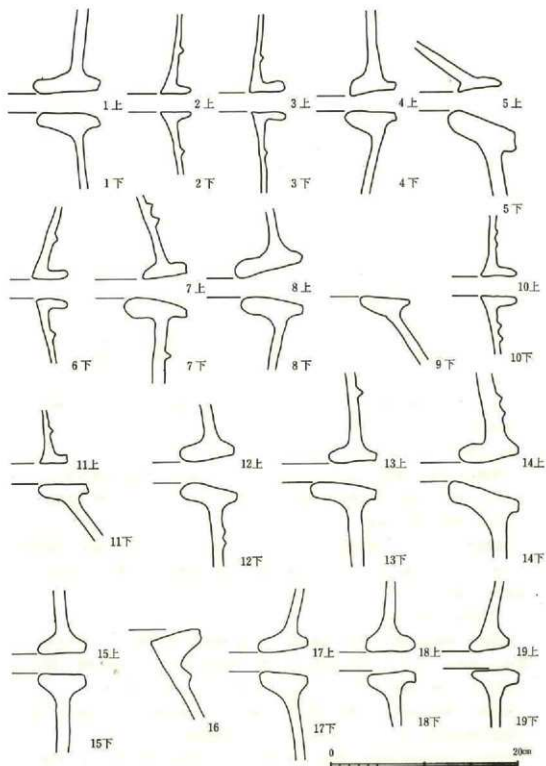


Fig. 18 船石遺跡北区出土葬棺口縁部実測図

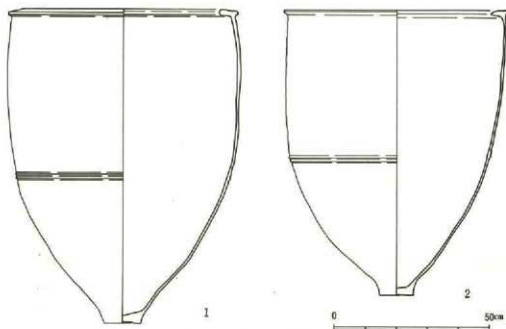


Fig. 19 船石遺跡1号支石墓甕棺実測図 (1;下甕、2;上甕)

つく2条の断面三角形突帯も大きめなもの(11号下)である。器高62cmで、小児用の甕棺として利用されたものと考えられる。

iii) 小型甕 8個体出土した。

小型甕A 砲弾形の器体に、断面逆L字形口縁がつき、口縁部下に断面三角形突帯がつくものである。突帯が1条のもの(Aa…2号上・下、3号上・下)と2条のもの(Ab…10号上・下)に分れる。器高は42cm~48cm。

小型甕B いちじく形の器体に断面逆L字形口縁がつき、その下に大きめの断面三角形突帯が1条つくもの(6号上・下)である。口縁上面はわずかに曲面となり外側へやや垂れる。器高46cm~47cm。

iv) 大型鉢 6個体出土した。

大型鉢A 鉢形の器体に、内側への張り出しがつよい断面T字形口縁がつくものである。口縁部下に突帯がつかないもの(Aa…12号上)と、断面三角形突帯が1条つくもの(Ab…13号上)、2条つくもの(Ac…14号上)に分れる。器高はそれぞれ57cm、49cm、57cmである。

大型鉢B 鉢形の器体に、外側への張り出しも強い断面T字形口縁がつき、口縁部下に大きな断面三角形突帯が2条つくもの(7号上)である。器高40cm。

大型鉢C 笠形の浅い器体に、外側への張り出しがつよい断面T字形口縁がつき、突帯はつかないもの(5号上)である。器高28cm。

Tab. 4 船石遺跡北区出土薬棺一覧表

(単位: cm)

発掘番号	上・下	器種	器高	口径	器体の形態	口縁部の断面形態	突 帯
1	上	大型甕	91	67	砲弾形	T字形の内側への張り出しが大きい	胴部に断面三角形突帯2条
	下	大型甕	92	67	砲弾形	T字形の内側への張り出しが大きい	胴部に断面三角形突帯2条
2	上	小型甕	42	34	砲弾形	逆L字形	口縁部下に断面三角形突帯1条
	下	小型甕	42	34	砲弾形	逆L字形	口縁部下に断面三角形突帯1条
3	上	小型甕	46	37	砲弾形	逆L字形	口縁部下に断面三角形突帯1条
	下	小型甕	48	39	砲弾形	逆L字形	口縁部下に断面三角形突帯1条
4	上	大型甕	81	—	砲弾形	T字形の内側への張り出しが厚く大きい	胴部に細かい断面三角形突帯2条
	下	大型甕	83	—	砲弾形	T字形の内側への張り出しが厚く大きい	胴部に細かい断面三角形突帯2条
5	上	大型鉢	28	73	笠形	T字形	無
	下	大型鉢	110	75	砲弾形	T字形の内側への張り出しが大きい	胴部に断面三角形突帯2条
6	上	小型甕	46	37	いちじく形	逆L字形	口縁部下に断面三角形突帯1条
	下	小型甕	47	39	いちじく形	逆L字形	口縁部下に断面三角形突帯1条
7	上	大型鉢	40	73	鉢形	T字形	口縁部下に断面三角形突帯2条
	下	大型甕	98	76	砲弾形	T字形の内側への張り出しが厚く大きい	口縁部下に断面三角形突帯1条、胴部に断面三角形突帯2条
8	上	大型甕	97	68	砲弾形	T字形の内側への張り出しが大きい	胴部に断面三角形突帯2条
	下	大型甕	96	70	砲弾形	T字形の内側への張り出しが大きい	胴部に断面三角形突帯2条
9	上	大型鉢	—	—	鉢形	—	—
	下	中型甕	62	48	戴頭卵形	T字形の内側への張り出しが厚く大きい	胴部に細かな断面三角形突帯2条
10	上	小型甕	44	39	砲弾形	逆L字形	口縁部下に断面三角形突帯2条
	下	小型甕	47	40	砲弾形	逆L字形	口縁部下に断面三角形突帯2条
11	上	小型鉢	23	42	鉢形	逆L字形	口縁部下に断面三角形突帯1条
	下	中型甕	62	45	戴頭卵形	T字形の内側への張り出しが厚く大きい	胴部に断面三角形突帯2条
12	上	大型鉢	57	66	鉢形	T字形の内側への張り出しが厚く大きい	無
	下	大型甕	92	73	砲弾形	T字形の内側への張り出しが厚く大きい	口縁部下と胴部に細かな断面三角形突帯をそれぞれ2条
13	上	大型鉢	49	—	鉢形	T字形の内側への張り出しが厚く大きい	口縁部下に断面三角形突帯1条
	下	大型甕	96	75	砲弾形	T字形の内側への張り出しが大きい	胴部に細かな断面三角形突帯2条
14	上	大型鉢	57	71	鉢形	T字形の内側への張り出しが大きい	口縁部下に断面三角形突帯2条
	下	大型甕	107	70	砲弾形	T字形の内側への張り出しが大きい	胴部に細かな断面三角形突帯2条
15	上	大型甕	85	62	砲弾形	T字形の内側への張り出しが小さい	胴部に細かな断面三角形突帯1条
	下	大型甕	87	66	砲弾形	T字形の内側への張り出しが小さい	胴部に細かな断面三角形突帯2条
16	単	大型甕	93	56	戴頭卵形	<字形(等)	口縁部下に幅広い断面三角形突帯1条、胴部に断面コ字形突帯2条
17	上	大型甕	82	59	砲弾形	T字形の内側への張り出しが大きい	胴部に断面三角形突帯1条
	下	大型甕	84	61	砲弾形	T字形の内側への張り出しが厚く大きい	胴部に断面三角形突帯1条
18	上	大型甕	87	63	砲弾形	T字形の内側への張り出しが小さい(内側等)	胴部に細かな断面三角形突帯2条
	下	大型甕	79	65	砲弾形	T字形の内側への張り出しが小さい(内側等)	胴部に細かな断面三角形突帯2条
19	上	大型甕	63	56	砲弾形	T字形の内側への張り出しが小さい(外側等)	胴部に細かな断面三角形突帯1条
	下	大型甕	72	52	砲弾形	T字形の内側への張り出しが小さい(内側等)	胴部に細かな断面三角形突帯1条
1号 支石墓	上	大型甕	90.0	72.4	砲弾形	T字形の内側への張り出しが小さい	胴部に細かな断面三角形突帯2条
	下	大型甕	99.2	73.8	砲弾形	T字形の内側への張り出しが小さい	胴部に細かな断面三角形突帯2条

※1号支石墓の薬棺以外は調査後取り上げていないので、法量は現地で計測した値であり必ずしも正確ではない。

(v) 小型鉢 1個体出土した。

小型鉢A 鉢形の器体に、断面逆L字形口縁がつき、口縁部下に一条の断面三角形突帯がつくもの(11号上)である。器高23cm。

(2) 船石下壁穴内出土遺物

船石下の巨大な壁穴からは、埋土や塊石に混って弥生土器と石器・鉄器が出土した。

(i) 弥生土器 (Fig. 22) 甕と支脚が出土した。

1~4・6は甕である。1は甕の口縁部で、体部上位をわずかに外反させたいわゆる如意形口縁をなす。胎土は暗褐色で砂粒を含む。2は甕の口縁部で、内傾する体部に細かな断面逆L字形口縁がつく。復元口外径21.0cm。胎土は暗黄褐色で砂粒を含む。3は甕の口縁部で、断面逆L字形口縁をなす。胎土は暗褐色で砂粒を含む。6は大型甕で、甕棺の破片と考えられる。やや内傾する体部に内外を面取りした断面逆L字形口縁がつくもので、口縁部下に、細く高い断面三角形突帯がつく。内外面ハケメ調整。胎土は内面黄褐色、外面暗褐色で砂粒を含む。5は支脚の脚部である。胎土は黄褐色で砂粒を多く含む。

(ii) 石器 (Fig. 21, PL. 16)

扁平片刃石斧である。現存長6.5cm、中央部で幅3.0cm、厚さ0.6cm。泥岩製かと思われる。

(iii) 鉄器 (Fig. 20 PL.16)

鉄鎌である。刃先を欠く。長方形に近いがやや先細りの鉄板の基部を刃部とほぼ直角に折り曲げている。刃はほぼ直刃となる。

現存長13.6cm、基部付近で最大幅3.2cm、厚さ3.5cm。

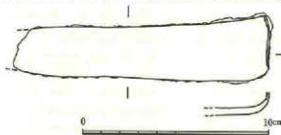


Fig. 20 船石下部壁穴出土鉄鎌実測図

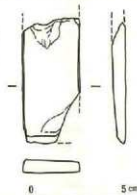


Fig. 21 船石下部壁穴出土石斧実測図

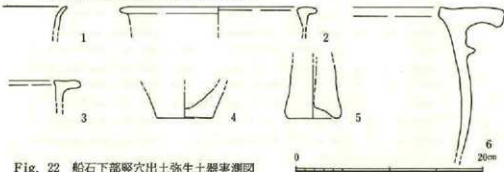


Fig. 22 船石下部壁穴出土弥生土器実測図

(3) 古墳出土遺物

1号墳では石室内から鉄剣1が、2号墳では石室内から鉄矛を含む鉄器、周溝その他から須恵器・鉄器が、3号墳では石室内から鉄剣・須恵器、周溝その他から土師器・須恵器・鉄器などを出土した。また2号墳石室内には弥生時代の磨製石斧も遺存していた。

以下、遺物の種類別に記述する。

(i) 土師器 (Fig. 23 PL. 18)

17～19は3号墳の前庭部前面付近出土。すべて坏である。17は内湾しながら垂直に立ち上る体部の上端を丸くおさめただけで口縁としている。内面ナデ調整であるが、外面にはヘラケズリの後ヘラミガキを施しているようである。口径15.2cm、器高6.0cm。胎土は黄褐色で砂粒を含む。18はひらき気味の体部の上位を外反させ口縁としている。内面ナデ調整、外面にはヘラミガキ状の痕跡が残る。口径15.9cm、現存高4.3cm。胎土は明褐色で砂粒を含む。19は内湾しながら上位で器壁が肥厚しながら立ち上る体部上端を丸くおさめて口縁としている。内面、外面下位はナデ、外面上位はヘラケズリ後、ヘラミガキ調整。口径15.8cm、現存高5.6cm。胎土は黄褐色で砂粒を含む。

(ii) 須恵器 (Fig. 23 PL. 18)

1～9は2号墳出土。6が前庭部前面の閉塞部上部から出土した以外はすべて北東部周溝内出土。

1～4は坏蓋である。1は低く平らな天井部に、垂直に下る口縁部がつくが、端部は丸く、稜は小さく丸い。回転ナデ調整で、天井部は回転ヘラケズリ調整。復元口径11.0cm、現存高3.1cm。胎土は微細な砂粒を若干含む密なもので、焼成は良好。色調は暗青灰色。2も1と同形態で、口縁端部を欠く。天井部外面は1と同様全面回転ヘラケズリ調整。ロクロ回転右方向。口径12.4cm、現存高4.0cm。胎土・焼成度は1と同じで、色調は青灰色。3は低く丸味をもつ天井部に、垂直に下る口縁部がつくが、端部を欠く。稜は鋭い。回転ナデ調整で、天井部外面は回転ヘラケズリ調整。ロクロ回転左方向。口径12.2cm、現存高5.3cm。胎土は砂粒を若干含むもので、焼成はやや良。色調は黄青灰色。4は3と同形態であり、口縁端部は丸い。天井部上面は回転ヘラケズリ調整。ロクロ回転左方向。口径11.0cm、器高5.2cm。胎土、焼成度とも3と似るが、天井部外面は灰かぶり器面が荒れている。

5は坏身である。浅く平らに近い底体部に、内傾した後直立してのびるたちあがりがつくが、端部は丸い。受部は上外方にのび、端部は鋭い。回転ナデ調整で、底体部外面は回転ヘラケズリ調整。ロクロ回転右方向。口径9.4cm、器高5.1cm。胎土は微細な砂粒を含む密なもので、焼成はやや良。色調は暗灰色。

6は高坏である。坏部は、深く丸い底体部に上外方に直線的にのびる口縁部がつくが、端部は丸い。口縁部下方には鋭い稜が1条つき、稜下方に1条の波状文がつく。脚部は、外湾しな

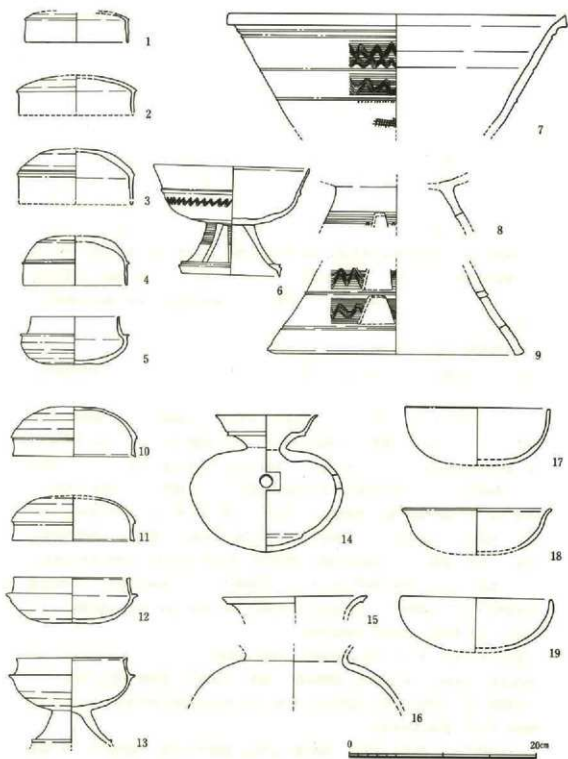


Fig. 23 船石遺跡古墳出土土師器・須恵器実測図 (1~9; 2号墳、10~19; 3号墳出土)

がら下外方に下り、裾部は短く水平にのびた後段をなして下内方へ下る、端部が鋭いものである。3方向に四角形スカシを有する。坏部は回転ナデ調整で、底体部外面%は回転ヘラケズリ調整。脚部は外面カキメ調整の他は回転ナデ調整。ロクロ回転右方向。口径17.0cm、器高11.4cm、脚裾部径10.4cm。胎土は微細な砂粒を含むが大粒の砂粒も若干含む。焼成は良で灰かぶりしている。色調は青灰色。

7～9は高坏形器台である。同一個体と考えられる。7は坏部である。ほぼ直線的に上外方へのびわずかに外反する体部上端に、水平にのび上方へのびる口縁がつくが、端部はやや鋭い。底体部下位は内湾する。口縁直下に2条、さらに下方4.6cmと7.8cmにはそれぞれ1条の小さな突帯がつく。内面はタタキのあと回転ナデ調整。外面はカキメ調整だが、下位突帯以下はタタキ痕を回転ナデ調整で消している。突帯間は上段に2条、下段に1条の波状文がつく。復元口径35.8cm。8・9は脚部である。ほぼ直線的に下外方へのび、端部は面取りされる。小さな突帯を3条つけ、その間にそれぞれ1条の波状文と、四角形スカシを入れる。スカシは上段・下段とも6ヵ所と思われる。内面回転ナデ調整、外面カキメ調整。裾部径27.6cm。脚部高は13cm内外と思われる。胎土は砂粒を含むもので焼成は良好。色調は坏部が暗茶褐色、脚部が褐色および灰褐色。口縁端部に自然釉がかかる。

10～16は3号墳出土。14・15・16が石室内から出土した他は北東部周溝内出土。

10・11は坏蓋である。深くやや丸い天井部に、下方後外反して下る口縁部がつく。端部はやや内傾する平面をなす。稜は鋭い。回転ナデ調整。ロクロ回転右方向。10は天井部外面%を回転ヘラケズリ調整で口径13.0cm、器高5.2cm。11は天井部外面%を回転ヘラケズリ調整で、口径13.0cm、器高4.7cm。どちらも胎土は砂粒を含み、焼成良好で色調は青灰色である。

12は坏身である。浅く平らに近い底体部に、内傾後直立してのびる口縁部がつくが、端部はやや内傾する平面をなす。受部は水平にのび、端部は丸い。回転ナデ調整で、底体部外面%は回転ヘラケズリ調整。ロクロ回転右方向。口径12.2cm、器高4.8cm。胎土は砂粒を含み、焼成は良好。色調は内面が青灰色、外面が黄灰色。

13は高坏である。坏部は、深く丸い底体部に、内傾して直立するたちあがりがつくが、端部は内傾する凹面をなす。受部は水平にのび、端部は鋭い。脚部は外湾しながら下外方に下り、裾部は短く外上方にのびた後段をなし内方へ下るものと考えられる。裾端部を欠く。回転ナデ調整。ロクロ回転右方向。坏部は底体部外面%は回転ヘラケズリ調整。口径11.6cm、現存高9.0cm。胎土は細かい砂粒を含み、焼成は良好。色調は青灰色。

14は大型甕である。丸味をもつ底部と球形に近く最大径を中位にもつ体部をなす。口頸部は外湾しながら大きくひらき、鋭い突帯がつき、外湾気味に上外方へのびる口縁部がつくが端部は水平になる。内外面丁寧な回転ナデ調整。ロクロ回転は右方向と思われる。最大径部やや上位に径0.9cmの円孔を穿つ。口径10.8cm、器高14.5cm、最大径16.3cm。胎土は少量の砂粒を含み、

焼成はやや良。色調は黄褐色の部分と青灰色の部分がある。

15・16は壺である。同一個体かも知れない。15は口頸部で、外湾して大きくひろく頸部には、短く外反後上外方へのびる口縁がつくが、端部は鋭い。16は内湾する体位上位に外反する口頸部がつく。体部破片下位にはタタキ痕が残るが、全面回転ナゲ調整。復元口径15.4cm。胎土は細かな砂粒を含むが多くはない。焼成は良好で、肩部と口頸部内面は灰かぶりしている。色調は青灰色。

(ii) 鉄器 (Fig. 24・25 PL. 19・20)

1は1号墳石室内出土。いわゆる蛇行状鉄剣である。全長71.5cm。身長56.8cm、茎長14.7cmとなる。身は両刃部に7カ所の山と7カ所の谷をつくりゆるやかに湾曲する。断面は鑄が片面に明瞭であり、他面は不明瞭でレンズ状となる。身は関の部分で幅4.05cm、厚さ0.7cm、中央部で幅3.4cm、厚さ0.6cm、鉈から4cm手前で幅2.7cm、厚さ0.5cmとなり、鉈に向かって幅・厚さとも小さくなる。関はわずかに斜目に切られ、基部に向かって幅が狭くなる茎がつく。茎は関との境で幅3.0cm、基部で幅1.6cmとなり、関から5.1cmと12.0cmの2カ所に径0.3cmの目釘穴がつく。厚さ0.5cm。

2・4～19は2号墳出土。北東部周溝内出土の13を除けば他はすべて石室内出土。

2は身がS字形に湾曲するいわゆる蛇行状鉄矛である。全長27.8cm。身長19.0cm、一部身と重複するが袋部長10.3cmとなる。身の断面は両面に鑄が明瞭で菱形をなす。身は関の部分で幅2.9cm、鉈から15.5cmのところ幅3.0cm、厚さ0.65cm、鉈から4cmのところ幅2.7cm、厚さ0.55cmとなる。袋部

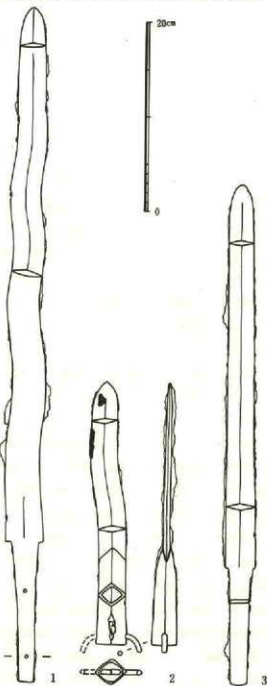


Fig. 24 船石遺跡古墳出土鉄器(1)実測図
(1: 1号墳 2: 2号墳 3: 3号墳出土)

は先端をく字形とし身を挟み固定しており、断面は菱形となり4つの稜は明瞭である。基部で幅2.7cm、厚さ3.25cm、中央部で幅2.9cm、厚さ2.4cmとなる。鉄板の厚さは0.2cm前後である。基部より0.8cmの両側に目釘穴を穿ち、径0.5cmの断面円形の目釘を差し込んでいるが、目釘は基部側へ湾曲し、袋部内では溶着している。身の先端付近に木質が残る。

4～7は鉄鎌である。4は平根式で、脇袂が深く鋭い逆刺をもつ。鋒は厚さ0.15cmで、刃部はS字形にゆるやかに湾曲する。現存長10.5cm。基には木質と樹皮が付着している。5は刀子形の尖根式で、逆刺を欠く。鉈はやや丸くなっている。鋒は厚さ0.3cmで、現存長8.9cm。6・7は茎の基部付近で、7には木質と樹皮が付着する。

8・9は工具の一種か。鉄鎌の茎に似た形態の鉄棒の先端を尖らせ、湾曲させている。8は木質と樹皮が付着している。8は現存長8.1cm。

10・11は幅0.7cm、厚さ0.15cmの鉄板状の棒を折り曲げた形態のもので、用途不明。同一個体の可能性がよい。10には木質が付着することや、2個の長さが、先の鉄矛の袋部の外周の長さに近いことなどから、鉄矛に付属する金具であった可能性もある。

12も用途不明。断面が浅いU字形をなす幅0.7cm厚さ0.1cmの棒状の板に、薄い鉄板を螺旋状に巻きつけている。現存長2.75cm。

13は鉄斧である。刃部の大半を欠く。厚さ0.8cmの鉄板の両側を折り曲げて着装部をつくるいわゆる袋状鉄斧である。現存長6.4cm、袋部の最大幅3.3cm。

14～18は螺旋状に湾曲する鉄棒である。用途不明。断面は1辺0.4cm前後の正方形をなす。18で長さ37.4cm(直に延した長さ)、14～17の長さをプラスすれば66.2cm以上にもなる。

19は鉄製刀子である。全長12.9cm。身長8.7cm、茎長4.2cmとなる。身は背がわずかに反るが、刃部は鉈部付近までは直刃である。関の部分で幅1.8cm、背厚0.45cm、鉈から3cmの部分で幅0.7cm、背厚0.3cm。関は直角に切れ、基部に向かって幅が狭くなる茎がつく。茎は中央部で幅0.95cm、厚さ0.3cm。関から茎中央にかけて鹿角製装具の一部が付着している。

3・21は3号墳出土。3は石室内、21は北東部周溝内出土。

3は鉄剣である。全長53.0cm。身長40.6cm、茎長12.4cmとなる。身は断面菱形をなす。関から鉈方向へ6.5cmのところ幅3.1cm、厚さ0.7cm、鉈から6cm手前のところで幅2.6cm、厚さ0.55cmとなり、鉈に向かって幅・厚さとも小さくなる。関は斜目に2段切れられ、基部に向かって幅が狭くなる茎がつく。基部から8.5cmのところ幅2.1cm、厚さ0.4cm。基部はやや丸くなる。錆のため目釘穴は不明である。

21は鉄製刀子である。身と茎の約半分を欠く。現存長8.4cm。関は上が斜目、下が直角に切られている。身は関から2.5cmのところ幅1.9cm、背厚0.35cm、関幅1.95cm。茎は関から1cmのところ幅1.3cm、厚さ0.5cm。基部の折れた部分には木質が付着する。

(iv) 石器 (Fig. 25 PL. 16) 2号墳石室内から1点出土した。

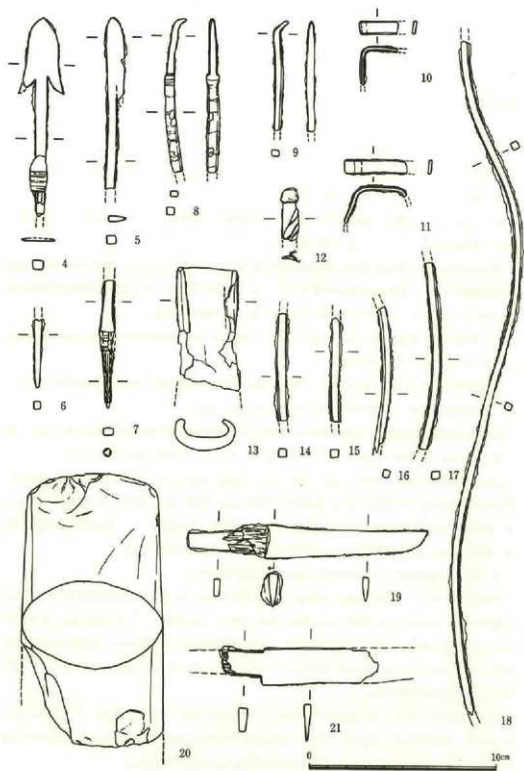


Fig. 25 船石遺跡古墳出土鉄器(2)・石器夹測図(4~20; 2号墳、21; 3号墳)

20は玄武岩製の太形給刃石斧で刃部を欠く現存長14.0cm、中央部で幅7.4cm、厚さ4.5cm。

(4) 船石下祭祀遺物

船石に供えたと考えられる土師器である。

土師器 (Fig. 26 PL. 17)

小皿と坏が、正確には数えていないが、おそらく1,000個以上出土した。

1～8は小皿である。径が大きい平底の底部に、短い口縁部がつく。丸味をもって、口縁部がわずかに内湾気味にひろくもの(1～4)、口縁部が極端に内湾するもの(5)、口縁部が直線的にひろくもの(6～8)に分けられる。口径7.4cm～8.4cm、器高0.9cm～1.3cmで、口径8.0cm、器高1.0cm内外が標準値である。胎土は砂粒を含み、色調は黄褐色、橙褐色、赤褐色など様々である。

9～17は坏である。径が大きい平底の底部に口縁部がつくが、口縁部は直線的にひろくもの(9～10)、わずかに内湾しながらひろくもの(12～14)、わずかに内湾しながらひろく口縁の端部を短かく外反させるもの(15)、わずかに外湾するもの(16)などに分けられる。口径11.8cm～13.8cm、器高2.2cm～3.1cmで、口径12.3cm、器高2.8cm内外が標準値である。胎土は砂粒を含み、色調は小皿と同じく様々に発色している。

小皿、坏ともに粘土塊から一気に成形し、回転糸切りで離している。ロクロ回転はほとんどが右回り。外底部には糸切り痕の後板目がつくものがあるが概して少ない。

土師器すべてを観察する時間的余裕が無かったので、ごく一部について記述した。

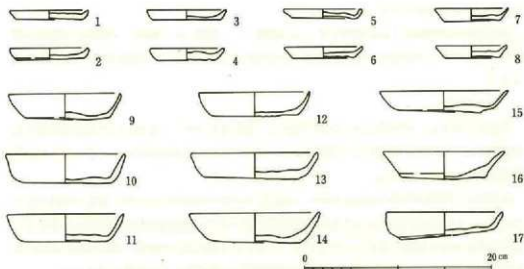


Fig. 26 船石遺跡船石下祭祀遺物実測図

V 総 括

船石遺跡は弥生時代の集落と墓地、古墳時代の古墳群、中世の祭祀跡などの性格をもつ、長期間にわたって形成された遺跡であることが調査の結果明らかになった。中でも弥生時代の巨大な支石墓、石室構造の推移が知れる古墳群、古墳出土のいわゆる蛇行状鉄剣や蛇行状鉄矛・古式の須恵器などは重要な問題を含むものとして注目される。

以下、調査の成果と問題点について、弥生時代、古墳時代、中世の各時代に大きく分けて簡単に述べてみたい。

1. 弥生時代の船石遺跡

(1) 集 落

南区から北区西部にかけての標高約23m以下の位置で9基検出されたが、周辺の地形や遺物散布状況を見ると、南方や西方および北方の広範囲にわたって集落が営まれたことが想像される。特に西方水田部は、西方の切通川が形成する谷底平野まで緩傾斜となっており、多数の竪穴住居跡が存在する可能性が大きい。

さて、発掘した6基の竪穴住居跡や貯蔵穴は、出土した土器により中期初頭から中期前半(城ノ越式土器を主体とする)にかけての所産と考えられる。北区のものも含めると平面円形のもの6基、平面長方形のもの3基に分かれる。平面円形の住居跡の規模は14.4m²~22.5m²が標準であるが、3号住居跡は62.2m²と格段に大きい。この3号住居跡は柱穴の数も多く、建て替えがおこなわれた可能性もある。

船石遺跡の南南西約1kmに位置する一本谷遺跡では、集落の中で格段に大規模な住居跡が確認されており⁽¹⁾、その構造や出土品の性格から特殊な用途の建物として使用された可能性も考えられる。

(2) 墓 地

北区のほぼ全城、標高約22m~24mの範囲で、妻棺墓を主体とする弥生時代墳墓の墓墳上面が確認され、その数は100基以上と推測される。また、これらの墳墓群の中に2基の支石墓が確認されたことは注目される。

弥生時代の墳墓は南区では検出されず、北区でも地形が急勾配となる東と西部では数を減じている。しかし天神社境内および北部の基壇状遺構下部でも妻棺墓の存在が確認されるので、本来の数はかなり増加するものと考えられ、その分布は東は北区の東端、西は北区の西端からやや西方まで、南は天神社の境内、北は基壇状遺構のやや北方までの区域と考えられる。

妻棺墓 19基について調査を実施したが、埋置されていたいわゆる妻棺(埋葬に使用される土器)としては大形甕、中形甕、小形甕、大形鉢、小形鉢などが用いられていた。これらは形

題的な特徴により18形式に分類したが、森貞次郎⁽²⁾高島忠平⁽³⁾、橋口達也⁽⁴⁾によってなされた編年に対応させると次のようになる。

時期 器種	弥生時代中期前半		弥生時代中期後半	
大形甕		A ₁ ・A ₂ ——B ₁ ・B ₂ ——	——C・D——	——E——
中形甕		A ₁ ・A ₂		
小形甕		A ₁ ・A ₂ ——	——B	
大形鉢		A ₁ ・A ₂ ——	——B・C	
小形鉢		A		
森	城ノ越式	汲田式	須玖式	立岩式
高島	IV式	V式	VI式	VII式
橋口	KII _a 式 KII _b 式	KII _c 式	KIII _a 式	KIII _b 式・KIII _c 式

以上のように2号支石墓周辺の19基の甕棺墓は、中期前半の内でも新しい時期に集中して営まれており、最も新しいものは中期後半の16号甕棺墓である。これらのうち船石(2号支石墓)に接近した位置に存在するものは、ほとんどが船石に向かって甕棺が埋置されており、その墓壇は船石下部へは切り込んでいない。また甕棺埋置の方法については北九州甕棺墓盛行地帯の一般的傾向に等しく、中期中頃前後では水平埋置が増加し、中期後半になると傾斜がつよくなっている。

船石遺跡では前期末から後期にかけての甕棺片も散布しているところから、長期的に営まれた墓地であったと考えられる。前期末から後期にわたる墓地としては、船石遺跡の西方約1kmの二塚山遺跡⁽⁵⁾、西方約4kmの三津永田遺跡⁽⁶⁾が存在するが、どちらも漢式鏡など豊富な副葬品をもつ墓地として著名である。

支石墓 2基について調査を実施したが、1号支石墓は亀石と呼ばれる亀甲形の上石をコの字形に配された約10個の塊石で支える形式のものであり、2号支石墓は長さ5.41mの舟形をなす巨石を3個の大石で支える形式のものであった。下部構造として1号支石墓では中期前半の合せ口甕棺(大形甕B₁……汲田式)が埋置されていたが、2号支石墓では直下の大きな竪穴を埋葬施設とみることは困難である。竪穴の内部からは弥生時代前期末(板付II式)から中期中頃(須玖式)にかけての土器片や扁平片刃石片、鉄鎌などが塊石とともに出土しており、竪穴上面では鎌倉時代の土師器の坏・小皿が出土していることなどから、この竪穴は弥生時代中期中頃(鉄鎌は後期以降のものか)以降鎌倉時代までの間の所産と考えられる。船石を天井石として利用した貯蔵用?の竪穴かも知れないが、埋土の堆積状況など単純に納得できない点が多い。1号支石墓で支石の一つと考えられる塊石が下部の甕棺を破壊している点とあわせて興味深い。

さて、2号支石墓が営まれた年代であるが、周辺の甕棺墓群の位置や埋葬方向などの点で、

明らかにこの巨石船石の存在を意識しているところから中期前半(汲田式)、またはそれ以前と考えられ、あるいは1号支石墓と同時期のものであるかも知れない。

西北九州において弥生時代中期および中期の可能性がよい壘棺を下部埋葬主体とする支石墓としては佐賀県唐津市葉山尻⁷⁷⁾、同北波多村徳須恵⁷⁸⁾、同大和町南小路⁷⁹⁾、福岡県北崎村小田⁸⁰⁾、同浮羽町朝田⁸¹⁾、同大牟田市羽山台⁸²⁾例などが知られており、また福岡県春日市須玖岡本⁸³⁾、佐賀県唐津市宇木汲田遺跡⁸⁴⁾では巨大な支石墓が存在していたことがほぼ確実と考えられている。

船石遺跡1号支石墓については、上石は唐津市の葉山尻、五反田⁸⁵⁾、割石⁸⁶⁾などのそれに似た亀甲状の花崗岩半割材であるが、支石の配置は塊石約10個を壘棺墓墳上縁にコの字形に配する類例のない形式のものである。2号支石墓は規模・構造の点で注目される。上石は長さ5.41m、幅3.12m、厚さ約1mと須玖岡本例(長さ3.33m、幅1.82m、厚さ約0.3m)や南小路例(長さ3.2m、幅2.4m、厚さ約0.45m)、宇木汲田例(長さ3.07m、幅1.04m、厚さ0.39m)などの大規模なものをはるかにしのぐ大きさである。わが国の支石墓がその影響下に発生したと考えられる朝鮮半島の支石墓⁸⁷⁾を含めても、かなり大規模なものと言うことができ、国内ではもちろん最大級である。この2号支石墓は構造的には、松尾慎作が車子式と蓋盤式の折衷式と考える⁸⁸⁾ように、支石が立てられてはいるものの、低い点やその配置からは、やはり蓋盤式(南方式)支石墓の影響を受けたものと考えられる。

さて、2号支石墓の内部主体の問題であるが、下部の竅穴により破壊されたか、本来主体部をもたず周辺壘棺墓群の標式的なものであったか不明である。数基の壘棺墓の標式となっていたと考えられるものとして、葉山尻1号支石墓、宇木汲田例などがあるが、前者は壘棺墓6基の埋葬施設をもち、後者は壘棺墓3基が埋葬施設と考えられる。前者は上石直下に壘棺が存在し、壘棺埋置後上石が置かれたことが分かるが、後者は大石の端に壘棺が切り込んだ形となっており壘棺と上石の前後関係は不明である。船石2号支石墓は内部施設が後世破壊されたかも知れないが、弥生時代中期前半にはすでに周囲の壘棺墓群の標式的な存在となっていたことは否定できない。佐賀平野でも支石墓、あるいは支石墓の上石の可能性が高い亀甲状の花崗岩の例が増加しつつある。縄文時代晩期～弥生時代初頭では佐賀市久保泉丸山⁸⁹⁾、中原町番田⁹⁰⁾、弥生時代前期末～中期では大和町南小路、神崎町伏部大石⁹¹⁾、同四本黒木⁹²⁾、同熊谷⁹³⁾、同馬郡⁹⁴⁾、東青振村西石助⁹⁵⁾、同松の森⁹⁶⁾などがあげられ、さらに類例が増加するものと考えられる。これらのうち調査されていないものもいくつかあり、それらの内容が解明されるにつれて船石遺跡支石墓のもつ意義もおのずから明らかになってこよう。

なお船石遺跡では1号墳天井石(鼻血石)、2号墳・3号墳側壁などに用いられている大石も本来支石墓の上石として利用された可能性が強いことを付記しておく。

2. 古墳時代の船石遺跡

古墳時代の遺構としては3基の古墳を調査したが、1号墳は墳丘と周溝、2号墳は墳丘南部、3号墳は墳丘と石室上部が破壊されていた。1号墳は天神宮の建立などに伴ない墳丘などが破壊されたであろうことは想像にかたくないが、2号墳・3号墳は径10m前後の小規模な円墳であった。これら3基の古墳は巨石船石を取囲むように、船石の南・東・北に接する位置に構築され、古墳時代に至っても船石が古墳の位置決定について規制となっていたことが窺える。

(1) 石室

石室は3基とも異なる構造のものである。3基とも5世紀中頃前後から5世紀終り頃までの所産であることは、出土した須恵器などから分かるが、1号墳・2号墳・3号墳の順で、6世紀に入って盛行する本格的な横穴式石室への構造の変遷が窺えて興味深い。

1号墳石室はやや中おくらみの狭長な長方形に近い平面形の竪穴系横口式石室で壁体は腰石としてやや大きい塊石を用いている。横口部は長めの塊石2個を立てただけで、横口前面は発掘していないが斜め上方から入る形式の前庭部になるものと推測される。天井石として長さ3m以上の大石を用いるが、同様な例は支石墓群内に構築された唐津市迫頭古墳群²⁹⁾の竪穴系横口式石室に多くみられる。

2号墳石室は狭長な長方形をなす平面形の古式の横穴式石室で、壁体は北東壁は1枚石を用い、他の2面は大きな腰石を1枚据えて上部は塊石を平積みするが、この種の石室としては特異な構造である。玄門には柱状の石を袖石とし、間には框石を置く。前庭側壁は一部塊石を平積みするが全体的に稚拙なつくりである。この前庭側壁上部には天井石ともみえる石が架構されるが、前庭部が短い階段状となっているところから、追葬時にはこの上石を動かす形式のものであったかも知れない。

3号墳石室はいわゆる羽子板形の平面形をなす古式の横穴式石室で、玄室の壁体にはそれぞれ1個の腰石を据えている。上部の構造は不明であるが、構造的には船石遺跡の南西約1.8kmに位置していた大塚前方後円墳³⁰⁾(目達原古墳群)の石室に類似しているが、規模が小さく、また船石3号墳の框石が両裾石間に存在することなどは相違点としてあげることができる。楯石の存在は不明である。前庭側壁は2号墳と比較すればより整然と積まれているが、前庭部が斜め上方から入る形式であることは同じである。

これら3基の古墳は、墳丘規模や出土した副葬品の特徴などから、ある一定の政治的階層にあった人々によって営まれたものと推測され、この点一つの地域においてある階層が富んだ古墳の石室の変遷を知る好資料である。

(2) 出土遺物

出土遺物としては特殊な性格をもつと考えられる蛇行状鉄剣・蛇行状鉄矛やこの地方では出

土例が少ない古式の須恵器などが注目される。

2号墳出土の蛇行状鉄矛は身がS字形に湾曲し、装部が断面菱形となり、折れ曲がる目釘が付く特殊な形態のもので、他に出土例をみないものである。1号墳出土の蛇行状鉄剣は剣身が7回湾曲するものである。蛇行状鉄剣はS字形に2回湾曲するものから7回湾曲するものまで、15遺跡から18本程出土しているとされている⁹⁹が、県内でも大和町高島古墳からかつて出土しており¹⁰⁰、また最近、福岡県八女市立山山24号墳石室¹⁰¹からも出土しているので、船石とこれらの例を加えると18遺跡21本程となり、18遺跡のうち11遺跡が九州の遺跡ということになる。

7回湾曲（屈曲）しているものとして栃木県小山市桑57号墳出土例¹⁰²があるが、これは湾曲する刃部に対峙する部分は鋭くヒイラギの葉状となり形態的には様相を異にし、宮崎県野尻町大萩F区地下式横穴7号例¹⁰³の屈曲のしかたと同様である。船石例は開から蛇方向約2cmの部分および蛇から約12cmの部分の湾曲も含めて7つの湾曲部をもつものであるが、全く同形態のものとして宮崎県都城市牧原地下式横穴2号例¹⁰⁴を挙げることができる。全長48cmと船石例に比較すると小型であり、曲数5と考えられているが、船石例と同様な数え方では7つの湾曲部をもつということが出来る。

須恵器は2号墳、3号墳から出土したが、それぞれ周溝北東部にほとんどが集中している。

2号墳出土のものはほぼ陶器TK208型式¹⁰⁵に属するものと考えられるが、坏蓋・坏身の口縁端部が丸いことや、坏蓋には低く平らな天井部に垂直に下がる口縁部がつく優品（Fig. 23-1・2）が含まれていることなど前段階の要素を受けつぐものである。無蓋高坏（6）はやや新しい形態であるが、これは前庭部閉塞石上に供献されているもので、あるいは追葬時のものかも知れない。

3号墳出土のものは陶器TK23型式に属するもので、TK47型式までは下らない時期のものと考えられる。このころすでに佐賀平野北部山麓でも佐賀市神籠池窯跡¹⁰⁶などで須恵器の焼成が開始されている。

以上のような出土須恵器の編年から2号墳は5世紀後半でも古い時期、3号墳は5世紀終り頃の築造と考えてよい。また1号墳は石室構造が2号墳石室より前出的な形式である点や他の石室例¹⁰⁷などから、5世紀中頃前後の構築と考えたい。

蛇行状鉄剣については、『播磨国風土記』讃岐郡中川里の条の説話が示すように灵力をもつ異剣であるが、実戦にも耐えうる形態をとっている。記・紀が示すように、武器、とりわけ剣・矛・刀は「最も神秘的なものとして取扱われており」、多面「実際上の威力の発揚、換言すれば現実の武力が、戦闘用武器として相手を懼れせしむべき性能」をもってたと考えられている¹⁰⁸が、記・紀の中に蛇神に関する説話が多いことなどから、蛇行状鉄剣は一般的な直身の剣に比べ、より強く神秘的な威力を発揚したものと推察される。

蛇行状鉄剣の分布は畿内と日向に集中し、他は関東、北陸、北九州地方に少数知られるにす

ぎない。時期的には畿内のものが5世紀と古く、日向その他のものは新しいところから、中央から辺地族長へ授与したものとみる考え⁴⁸もある。

船石遺跡が存在する上峰村周辺は『肥前国風土記』の三根郡(物部郷・漢部郷・米多郷)、神埼郡三根郷にあたる地域と考えられ、『日本書紀』雄略天皇十年の条に「筑紫嶺県主泥麻呂」、「古事記」に「筑紫之米多君」、「国遺本紀」に「米多国造都紀女如」などの人物が登場するなど、当地域の政治情勢を示唆するかのようである。県主と国造の関係や性格などについてはまだ不明な点が多いが、畿内周辺における国造の成立時期については4世紀末期から5世紀初頭と考えられ⁴⁹、米多国造の補任を5世紀中頃とする考え⁴⁹はうなずける。

上峰村から三田川町周辺にかけて5世紀以降の前方後円墳7基、円墳5基以上からなる目達原古墳群が存在しており、従来より米多国造により営まれた墳墓群に比定されているが、径10m前後の円墳船石古墳群の被葬者はいったいどのような階層の人々であっただろうか。古墳の石室構造は目達原古墳群の石室構造の前出的なものと重複する時期のものもあり、また副葬品の内容も考慮に入れるならば、米多国造家の勢力範囲内において、国造の職掌の一部を担っていた階層であったことが窺えるとともに、蛇行状鉄剣・鉄矛にみられる武器祭祀的な性格からは、先の『肥前国風土記』の物部郷、綾部郷などの説話にみられるように物部や忍海部との関わりも考えられる。これらは来目皇子による新羅征伐に関するもので、物部若宮部を遣わしてこの村に社をつくり物部経津主神を祭らせたこと、新羅征伐のために忍海漢人に兵器を造らせたことが記されており、祭祀や武器に関するものであり、船石古墳群の被葬者は国造家の内部で、武器あるいは祭祀に関係の深い集団の長とも考えられるが、推定の域を出ない。

今後、目達原古墳群をはじめその周辺(中原町から神埼町山麓地域)に分布する6基の前方後円墳を含む古墳群の検討をおこなう必要がある。

3. 中世の船石遺跡

中世の遺構と考えられるものに南区1号溝や船石(2号支石墓上石)下祭祀遺構があるが、北区北部に位置する基壇状遺構もあるいはこの頃に構築されたかも知れない。

1号溝については出土遺物が土師器小皿の細片数点にすぎず、掘削の時期を明らかにすることは不可能であるが、船石下祭祀遺構の土師器はほぼ年代が知れる。これらはすべてロクロ成形による糸切り雕しの技法によるもので、坏は口径11.8cm~13.8cm、器高2.2cm~3.1cmと法量、形態に個体差がめだっており、またこれら土師器群は比較的厚く堆積していることなどから、長期間にわたって供献されたものらしい。ちなみに大宰府周辺のこの種土師器の編年⁴⁹によれば、13世紀前半~14世紀前半のものと推定される。13世紀前半といえば、寛喜年間の全国的な風水害や飢饉が知られているが、このような天変地異の続発が契機となって、巨石信仰がおこなわれ始めたのかも知れない。

また基壇状遺構については、その位置関係から巨石船石との関連が考えられるが、推測の域を出ない。全域について調査しないと何とも言えないが、類似した構造をもつ例として一乗谷朝倉氏遺跡などの屋敷の外周石列があげられる。石列に大石を両側に立てた門跡とされる部分(門S I 2533)¹⁰⁾は船石例の倒れた大石との関連で興味深い。いずれにしても後日の調査をまちたい。

註

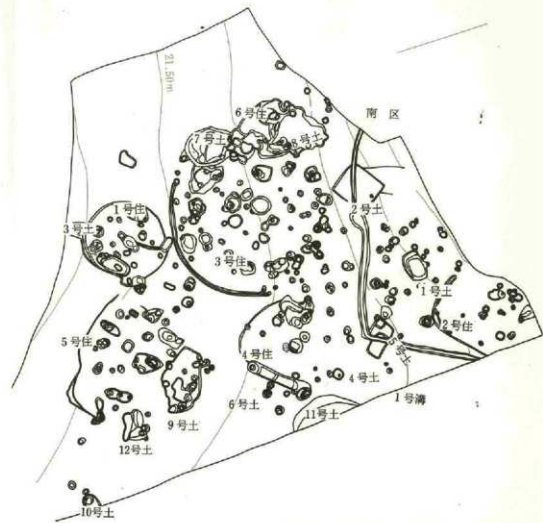
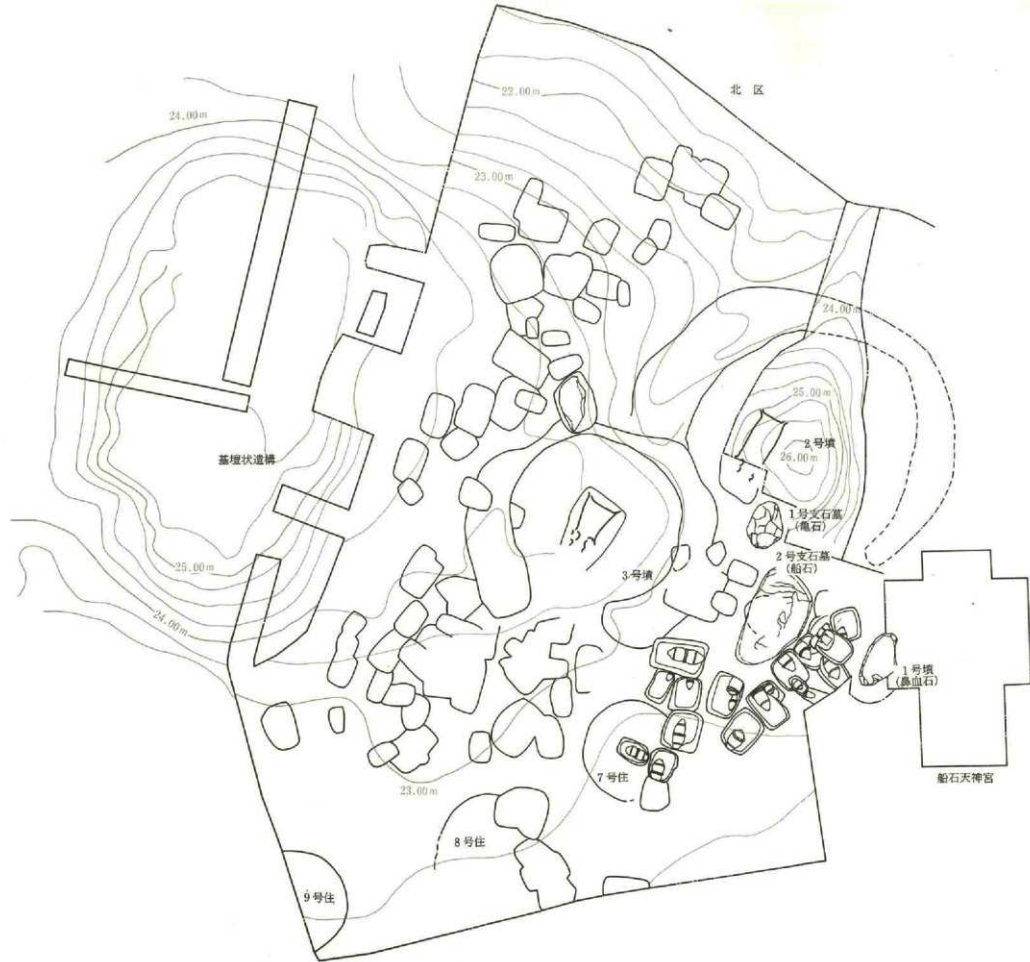
- (1) 七田忠昭「一本谷遺跡」上峰村文化財調査報告書 1983
- (2) 森貞次郎「弥生時代における細形銅剣の流入について」『日本民族と南方文化』 1968
- (3) 高島忠平「墓棺の編年」『立石遺跡』 1977
- (4) 横口達也「墓棺の編年の研究」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告X X I 1979
- (5) 石塚喜佐雄・七田忠昭編「二塚山」佐賀県文化財調査報告書第46集 1979
- (6) 金岡丈夫・坪井清足・金岡徳「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』 1961
- (7) 松尾徳作「北九州支石墓の研究」 1957
- (8) 註(7)に同じ
- (9) 木下之治「大和町南小路支石墓」『新郷土』 1974
- 10) 文化財保護委員会「志登支石墓群」 1956
- 11) 註(10)に同じ
- 12) 大牟田市教育委員会「羽山台遺跡」 1975
- 13) 島田貞彦「筑前須玖史前遺跡の研究」 1930
- 14) 森貞次郎・岡崎敬・藤田等・高島忠平「宇木汲田遺跡」『未履園』 1982
- 15) 註(7)に同じ
- 16) 註(7)に同じ
- 17) 金載元・尹武炳「韓国支石墓研究」 1967
三上次男「朝鮮原始墳墓の研究」 1961 他
- 18) 註(7)に同じ
- 19) 佐賀県教育委員会「丸山遺跡発掘調査概報」 1979
- 20) 高瀬哲郎他「香田遺跡」 1981
- 21) 昭和53年佐賀県教育委員会調査
- 22) 八尋実「四本黒木遺跡」神埼町文化財調査報告書第6集 1980
- 23) 中期の墓棺基群中に大石が存在する
- 24) 中期の墓棺基群に近く大石が存在する。
- 25) 堤安宿「西不動遺跡」九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報第4集 1981
- 26) 東春振村史執筆委員会「東春振村史」
- 27) 岡崎敬・松永幸男「追頭古墳群」『未履園』 1982
- 28) 松尾徳作「日達原古墳群調査報告」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第9輯 1960
- 29) 田中茂「地下式横穴出土の蛇行剣について」日本考古学協会昭和51年度大会研究発表要旨 1976
- 30) 松尾徳作「都賀城高島古墳」佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告第8集 1949
- 31) 佐田茂・伊崎俊秋他「立山山古墳群」八女市教育委員会 1983
- 32) 大和久美平「築57号墳発掘調査報告書」小山市教育委員会 1972
- 33) 宮崎県総合博物館「日向の古墳展」 1979、
- 34) 註(3)に同じ
- 35) 田辺昭三「陶邑古窯址群」平安学園考古学クラブ 1966

中村浩『和泉陶器の研究』 1981 他

- ⑥ 小田富士雄「神籠池須恵器窯跡」佐賀県文化財調査報告書第16集 1967
- ⑦ 榎沢一男「壱穴系横口式石室再考」『古文化論集』 1982 他
- ⑧ 末永雅雄『日本上代の武器』 1940
- ⑨ 註⑤・⑧に同じ
- ⑩ 新野直吉『研究史国造』 1974
- ⑪ 米倉二郎『古代』『上峰村史』 1979
- ⑫ 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」九州歴史資料館研究論集 4 1978 他
- ⑬ 福井県立朝倉氏遺跡資料館『一乗谷朝倉氏遺跡XIV』 1983

Tab. 5 遺構番号新旧対照表

報告書での番号 (新番号)	調査時の番号 (旧番号)	報告書での番号 (新番号)	調査時の番号 (旧番号)
竪穴住居跡		2号甕棺墓	SJ113 甕棺墓
1号住居跡	SB005 住居跡	3号 //	SJ114 //
2号 //	SB006 //	4号 //	SJ115 //
3号 //	SB007 //	5号 //	SJ116 //
4号 //	SB008 //	6号 //	SJ117 //
5号 //	SB010 //	7号 //	SJ118 //
6号 //	SB012 //	8号 //	SJ119 //
7号 //	—————	9号 //	SJ120 //
8号 //	—————	10号 //	SJ121 //
9号 //	—————	11号 //	SJ122 //
土壇 (貯蔵穴)		12号 //	SJ123 //
1号土壇	SK002 土壇	13号 //	SJ124 //
2号 //	SK003 //	14号 //	SJ125 //
3号 //	SK004 //	15号 //	SJ126 //
4号 //	SK009 //	16号 //	SJ127 //
5号 //	SK011 //	17号 //	SJ128 //
6号 //	SK013 //	18号 //	SJ129 //
7号 //	SK014 //	19号 //	SJ130 //
8号 //	SK015 //	支石墓	
9号 //	SK018 //	1号支石墓 (亀石)	SX105遺構
10号 //	SK019 //	2号 // (船石)	SX106 //
11号 //	SK020 //	古墳	
12号 //	SK023 //	1号墳 (鼻血石)	SX107遺構
溝		2号墳	ST101 古墳
1号溝	SD001 溝	3号墳	ST102 //
甕棺墓		その他	
1号甕棺墓	SJ112 甕棺墓	基壇状遺構	ST103 古墳



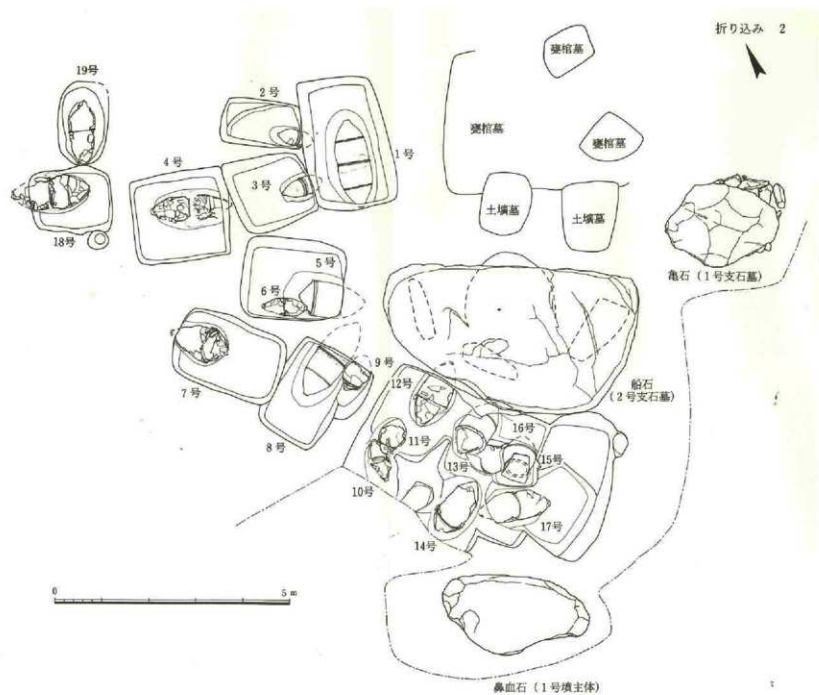
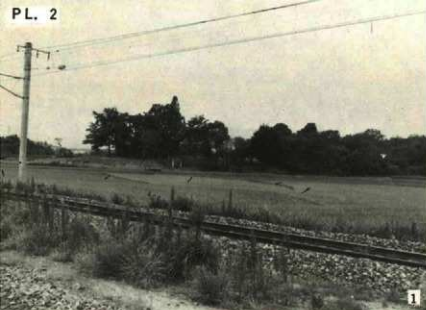


圖 版





1. 船石遺跡遠景〈南東から〉
2. 船石遺跡近景〈南東から〉
3. 船石遺跡北区
調査前の状況〈南から〉



1. 船石遺跡南区〈南から〉
2. 同 上 〈南西から〉
3. 同 上 〈北から〉



船石遺跡北区航空写真〈北から〉



1

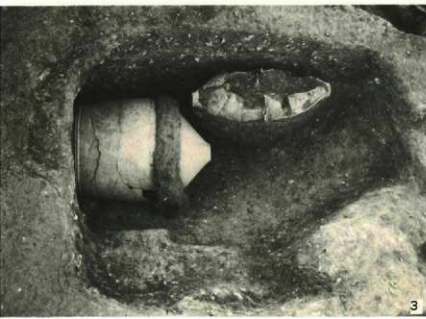


2

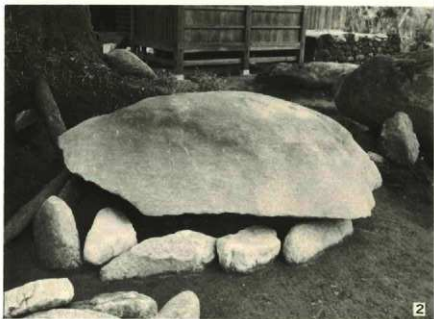


3

1. 船石 (調査前) <北から>
2. 鼻血石 (調査前) <北から>
3. 亀石 (調査前) <西から>



1. 舟石と壔棺墓
〈北西から〉
2. 舟石南西壔棺墓群
〈南東から〉
3. 5号(大)・6号(小)壔棺墓
〈北東から〉



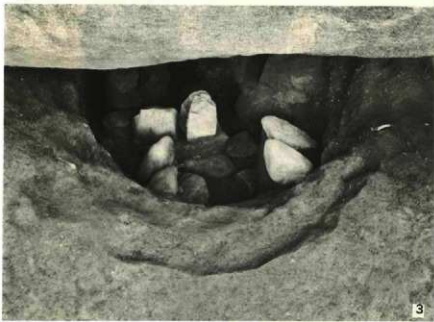
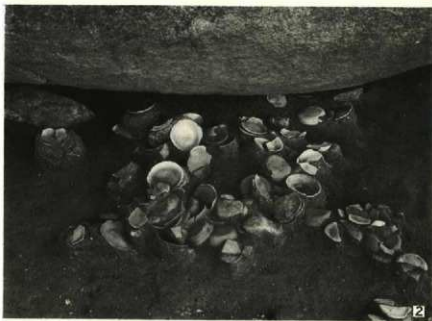
1. 亀石〈東から〉
2. 同上〈北から〉
3. 亀石下墓棺〈北から〉



1. 舟石〈南から〉

2. 同上〈北から〉

3. 同上〈北西から〉



1. 舟石下祭祀遺構
〈東から〉
2. 舟石下土師器群
〈北から〉
3. 舟石下部竅穴
〈北から〉



1. 鼻血石 (1号墳)
〈北東から〉
2. 1号墳石室
〈南から〉
3. 同
上
〈西から〉



1



2



3

1. 1号墳石室横口部
〈東から〉
2. 1号墳石室東壁
蛇行状鉄剣出土状況
3. 蛇行状鉄剣出土状況
〈北から〉



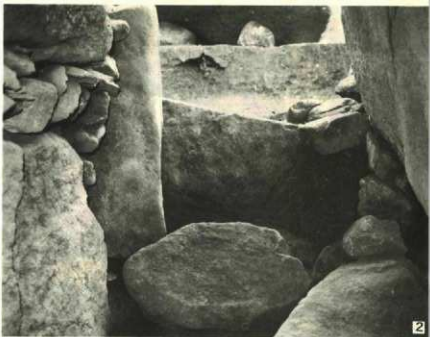
1. 2号墳墳丘

2. 2号墳石室閉塞石と亀石
〈北から〉

3. 2号墳石室閉塞石
〈北西から〉



1



2



3

1. 2号墳石室
〈北西から〉
2. 同 上
〈南東から〉
3. 蛇行状鉄矛出土状況



1



2



3

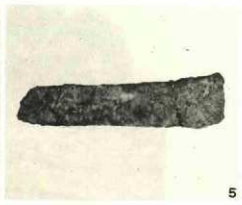
1. 3号墳全景〈北から〉
2. 3号墳石室〈北西から〉
3. 同 上〈南東から〉



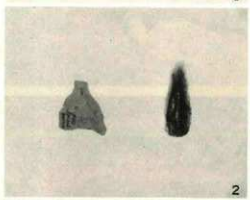
1. 基壇状遺構
〈南から〉
2. 同上 列石
〈南から〉
3. 同上 列石
〈南から〉



1



5



2



6



3

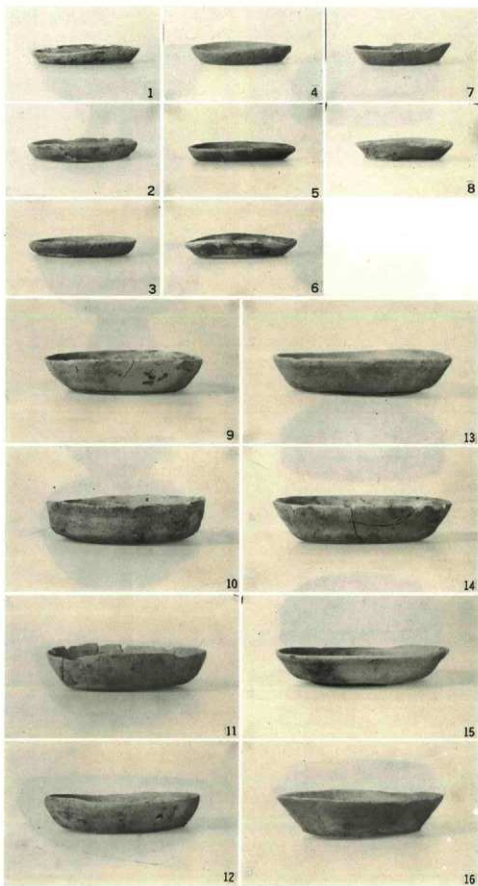


7



4

- 1. 10号土壙出土
- 2. 石鏃・剝片
- 3. 磨製石器
- 4. 11号土壙出土
- 5. 船石下部竅穴出土
- 6. 龜石下甕棺(上甕)
- 7. 同 上(下甕)



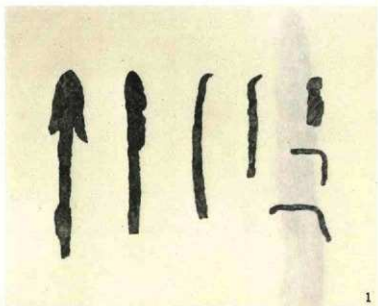
船石下祭祀遺構出土

1～8 土師器小皿

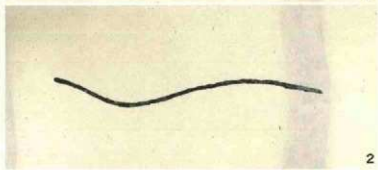
9～16 土師器坏



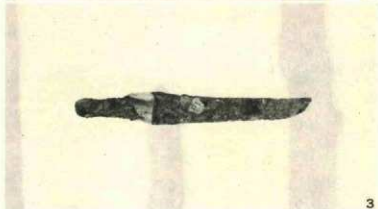
1 ~ 3 2号墳出土
4 ~ 10 3号墳出土



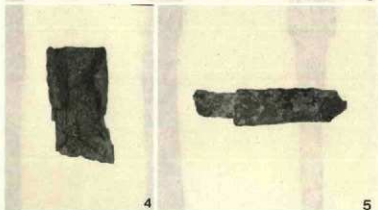
1



2



3

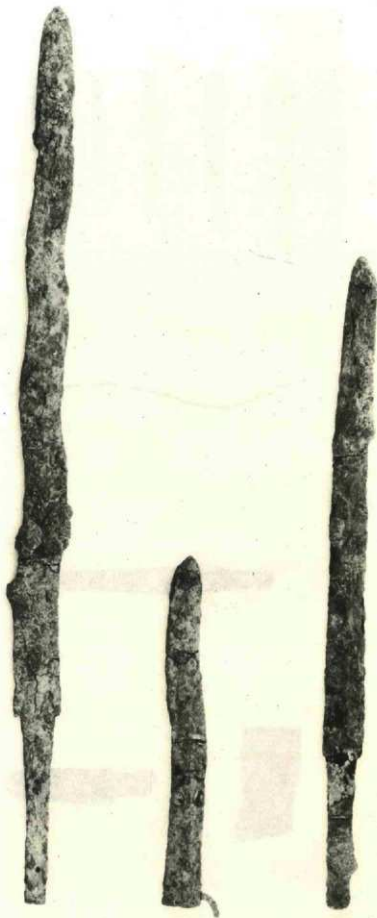


4



5

1. 2号墳石室内出土鉄器
2. 同上 出土鉄器
3. 同上 出土鉄刀子
4. 2号墳周溝出土鉄斧
5. 3号墳周溝出土鉄刀子



左から
蛇行状鉄剣
（1号墳石室内出土）
蛇行状鉄矛
（2号墳石室内出土）
鉄 剣
（3号墳石室内出土）

上峰村文化財調査報告書

船石遺跡

昭和58年3月20日印刷

昭和58年3月31日発行

編集 上峰村教育委員会
発行 佐賀県三養基郡上峰村坊所712

印刷 (資) 佐賀印刷社
佐賀市高木瀬町長瀬(大和工業団地内)

